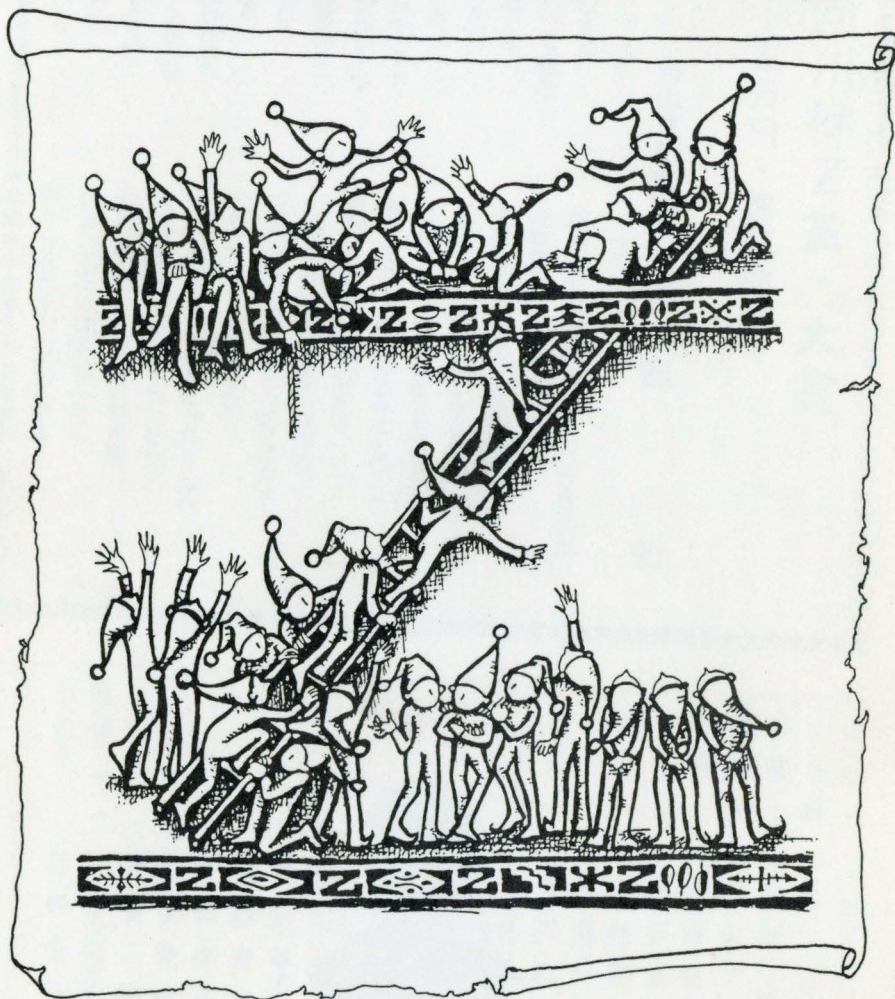


第 1 1 回

川柳乙賞入選作品集



乙賞選考委員会

第12回川柳Z賞・作品募集あんない

▽作品 自由吟三十句を十一組。一九九三年発表作品か未発表作品。

▽会費 不要です。

▽選考委員 (一部交渉中)

応募者で発表誌を希望の方は、
一〇〇〇円(切手可・送料共)
を同封してください。

▽大賞 大賞 十五万円と記念品

一名

準賞 記念品 一名

風炎賞 記念品 一名

優秀賞 記念品 若十名

▽締切り 一九九四年一月三十一日消印

▽送付先 〇三八

青森市新城字平岡二五八一

二二〇一二三

川柳Z賞選考委員会事務局

電話 〇一七七一八八一三四七九

▽用紙 出句専用紙を事務局にお申込み

下さるとご送付いたします。

返信用封筒を同封ください。

専用紙以外はご容赦ください。

川柳Z賞選考委員会

・応募作品は、一九九三年中の発表、または

未発表作品に限ります。一九九二年以前の

既発表作品は対象外と致します。

・ワープロ応募の方は、B4判に専用紙と同

じく、住所、郵便番号、姓、電話番号、

年齢をご記入下さい。

・規定外の時には、入賞を辞退していただく

ことがありますのでご留意をお願いします。

・応募作品をご送付の時に、B4判の十一枚

を重ねて二つ折りにして下さると整理の時

に助かります。

・入選作品を希望の方は、応募時に、千

円(送料共)同封して下さい。

発行日 一九九三年七月一日

編集人 杉野草兵

発行人 高田寄生木

発行所 038青森市新城字平岡二五八一

二二〇一二三

川柳Z賞選考委員会事務局

電話 〇一七七一八八一三四七九

(兼FAX)

頒価 一・〇〇〇円(送料二五〇円)

第十一回川柳Z賞・大賞

(賞金 十五万円・津軽塗楯)

岡山県和気町 石部 明

虫ピンで蝶刺す遊び夏はきぬ
美化されて春野の死者の立ち眩み
人体のひえびえと咲き蠢く喉
透明なガラスに移す沖の荒れ
一本の青を啜えて自嘲の夜
青錆びてことりこりと聖マリア
やわらかい舌十す月のひかりかな
馬面のあらわれてより霧晴れる
神の影耳を啜えて立ち去れり
胎内の何処か滅びて月の暈
いろいろの耳あつまって読経せり
ガラス器に揺れるでもなく夜の母
春という一語をもって刺しにゆく
白桃をつると剥けば神の声
桃の闇くすくす笑う影といふ

苦しんで夜明けを待っているさくら
夜の妻水光るまで研いでおり
手招きをするのでもなく百合の怪
老人はみな鶏つれてくる白夜
それぞれに死者青葱をぶらさげて
秋の夜の人体図鑑読みはじむ
夜の丘淡紅色の傷が咲き
いちめんに白菊浮かべ夜の貌
死者となり菊と菊との間に揺れる
冬空に大きな刃物漂わす
花が散らかる少年のしゃれこつべ
暗がり座れば菊の匂いせり
姉消えてゆくうす暗い写真館
船曳いて夜の桃皇はみだら
鏡から花粉まみれの父かえる

大賞 標準 選評 目次

石部 明 一
中川 一 二
桑野 晶子 三四
酒谷 愛郷 三五
岩村 憲治 三六
片柳 哲郎 三七
橋高 薫風 三八



石部 明

高田 寄生末 三九
寺尾 俊平 四〇
岡田 俊介 四一
八坂 俊生 四二
尾藤 三柳 四三
荻原 久美子 四四
杉野 草兵 四四

風災賞
あとがき

表紙絵

岩崎 眞里子

第十一回川柳Z賞・準賞

(賞金 一万円)

大阪府箕面市 中川 一

夜神楽の鉦女と果てむ火と果てむ
田の神に抱かれ続けて今も雪
亡父の筈と一夜流れて神の面
舞い果てて沈黙の森鬼らの刻
星の黙樹の黙亡父を呼び覚ます
道化で老いて月の林に耳澄ます
おろおろと飢えの真昼の渚のあたり
風哭いていま海光の仏たち
潮渺々 仏のこだま身のうちに
防人の眼を持ち伊伎の海士とし果つ
夜明けゆく潮鳴り胸に占部の血
辺境の両眼炎えて潮ゆく彼方
古歌蒼々 杜に客死の名を刻む
夢抱いて風の砦の武士の裔
漁獲せて島に怒りの鳥賊を割く

生死群青 神棚の灯のその背後
神も鬼もわが残像も闇濃き森
灯は千年ゆらぎて消えし影をいくつ
双眸に炎を棲ませ発ちゆく原
闇は瞳に 墳輪にとおき炎の記憶
影ら舞き 美しすぎる原爆図
うめく墳輪 戦無派は風と過ぎ
死者生者 ドームの暁の真白き時間
月の笛 地の精霊と流れゆく
鼓は祈り闇濃き天へのぼりゆく
幾人逝きて格子の涯の赤い花
神将の炎たつ眼と隆ちゆく秋
鳥は天をあこがれ続け童画の森
ヴィーナスも菩薩も明かい秋の迷路
どこか崩れてバベルの塔に灯のつく秋

上位二十傑

- | | | |
|----|----|---------------|
| 大賞 | 21 | 石部 明 (岡山) |
| 準賞 | 17 | 中川 一 (箕面) |
| 秀逸 | 15 | 萩原 久美子 (東京) |
| 秀逸 | 14 | 佐藤 岳俊 (岩手) |
| 秀逸 | 14 | 渡辺 和尾 (愛知) |
| 佳作 | 13 | 樋口 由紀子 (姫路) |
| 佳作 | 12 | 梅崎 流青 (柳川) |
| 佳作 | 10 | 吉田 浪 (岡山) |
| 佳作 | 10 | 本多 洋子 (松原) |
| 佳作 | 10 | 板東 弘子 (香川) |
| 佳作 | 9 | 高橋 かづき (西宮) |
| 佳作 | 7 | 情野 千里 (姫路) |
| 佳作 | 5 | なかはら いこ (名古屋) |
| 佳作 | 5 | 福井 陽雪 (青森) |
| 佳作 | 5 | 倉本 朝世 (大阪) |
| 佳作 | 5 | 吉田 三千子 (名古屋) |
| 佳作 | 4 | 倉富 洋子 (東京) |
| 佳作 | 4 | 坂東 乃理子 (加古川) |
| 佳作 | 4 | 岩崎 眞里子 (黒石) |
| 佳作 | 4 | 海地 大破 (土佐) |
| 佳作 | 4 | 広瀬 ちえみ (仙台) |

選考委員の眼

桑野 晶子 選

- | | |
|----|---------------|
| 特選 | 渡辺 和尾 (愛知) |
| 秀逸 | ① 石部 明 (岡山) |
| 秀逸 | ② 萩原 久美子 (東京) |
| 秀逸 | ③ 佐藤 岳俊 (岩手) |
| 佳作 | ① 中川 一 (大阪) |
| 佳作 | ② 板東 弘子 (香川) |
| 佳作 | ③ 吉田 浪 (岡山) |
| 佳作 | ④ 梅崎 流青 (柳川) |
| 佳作 | ⑤ 情野 千里 (姫路) |
| 佳作 | ⑥ 伊藤 紀子 (函館) |
| 佳作 | ⑦ 柿木 英一 (大東) |
| 佳作 | ⑧ 野沢 省悟 (青森) |
| 佳作 | ⑨ 樋口 由紀子 (姫路) |
| 佳作 | ⑩ 本多 洋子 (松原) |
| 佳作 | ⑪ 佐藤 幸子 (札幌) |
| 佳作 | ⑫ 松永 千秋 (福岡) |
| 特選 | 板東 弘子 (香川) |
| 秀逸 | ① 萩原 久美子 (東京) |

岩村 憲治 選

- | | |
|----|----------------|
| 秀逸 | ② 中川 一 (箕面) |
| 秀逸 | ③ 吉田 三千子 (名古屋) |
| 佳作 | ① 岩崎 眞里子 (黒石) |
| 佳作 | ② 柴崎 昭雄 (青森) |
| 佳作 | ③ 石部 明 (岡山) |
| 佳作 | ④ 渡辺 和尾 (愛知) |
| 佳作 | ⑤ 吉田 浪 (岡山) |
| 佳作 | ⑥ 梅崎 流青 (柳川) |
| 佳作 | ⑦ 海地 大破 (土佐) |
| 佳作 | ⑧ 大谷 晋一郎 (高松) |
| 佳作 | ⑨ 野沢 省悟 (青森) |
| 佳作 | ⑩ 山宮 風子 (長野) |
| 佳作 | ⑪ 柿木 英一 (大東) |
| 佳作 | ⑫ 樋口 由紀子 (姫路) |
| 特選 | 石部 明 (岡山) |
| 秀逸 | ① 渡辺 和尾 (愛知) |
| 秀逸 | ② 吉田 浪 (岡山) |
| 秀逸 | ③ 樋口 由紀子 (姫路) |
| 佳作 | ① 梅崎 流青 (柳川) |
| 佳作 | ② 情野 千里 (姫路) |
| 佳作 | ③ 萩原 久美子 (東京) |
| 佳作 | ④ 岩崎 眞里子 (黒石) |

片柳 哲郎 選

- | | |
|----|-----------------|
| 特選 | 石部 明 (岡山) |
| 秀逸 | ① 倉本 朝世 (大阪) |
| 秀逸 | ② 中川 一 (箕面) |
| 秀逸 | ③ なかはら いこ (名古屋) |
| 佳作 | ① 板東 弘子 (香川) |
| 佳作 | ② 樋口 由紀子 (姫路) |
| 佳作 | ③ 吉田 浪 (岡山) |
| 佳作 | ④ 岩崎 眞里子 (黒石) |
| 佳作 | ⑤ 萩原 久美子 (東京) |
| 佳作 | ⑥ 柴崎 昭雄 (青森) |
| 佳作 | ⑦ 広瀬 ちえみ (仙台) |
| 佳作 | ⑧ 渡辺 和尾 (愛知) |
| 佳作 | ⑨ 倉富 洋子 (東京) |
| 佳作 | ⑩ 吉田 三千子 (名古屋) |

佳作 ⑪ 松田悦子(札幌)
佳作 ⑫ 大谷晋一郎(高松)

橋高薫風選

特選 ① 福井陽雪(青森)
秀逸 ② 千葉風樹(黒石)
秀逸 ③ 高橋かつき(西宮)
秀逸 ④ 海堀酔月(堺)
佳作 ⑤ 松永千秋(福岡)
佳作 ⑥ 樋口由紀子(姫路)
佳作 ⑦ 梅崎流青(柳川)
佳作 ⑧ 広瀬ちえみ(仙台)
佳作 ⑨ 島村美津子(大阪)
佳作 ⑩ 峯裕見子(天津)
佳作 ⑪ 矢島玖美子(東京)
佳作 ⑫ 西秋忠兵衛(千葉)
佳作 ⑬ 野村禎子(北海道)
佳作 ⑭ 宮本めぐみ(仙台)
佳作 ⑮ 大橋政良(砂川)
佳作 ⑯ 奥山晴生(京都)
高田寄生木選
特選 ① 佐藤岳俊(岩手)
秀逸 ② 梅崎流青(柳川)

秀逸 ② 渡辺和尾(愛知)
秀逸 ③ 本多洋子(松原)
佳作 ④ 佐藤美文(大宮)
佳作 ⑤ 坂東乃理子(加古川)
佳作 ⑥ 立原みさと(土佐)
佳作 ⑦ 河瀬芳子(高槻)
佳作 ⑧ 長井すみ子(福岡)
佳作 ⑨ 伊東マコ(山形)
佳作 ⑩ 平宗星(東京)
佳作 ⑪ 岩間トキ(網走)
佳作 ⑫ 矢本大雪(弘前)
佳作 ⑬ 北川弘子(大阪)
佳作 ⑭ 高橋かつき(西宮)
佳作 ⑮ 板東弘子(香川)

寺尾俊平選

特選 ① 石部明(岡山)
秀逸 ② 梅崎流青(柳川)
秀逸 ③ 萩原久美子(東京)
秀逸 ④ 吉田浪(岡山)
佳作 ⑤ 倉本朝世(大阪)
佳作 ⑥ 渡辺和尾(岡山)
佳作 ⑦ 野沢省悟(青森)
佳作 ⑧ 樋口由紀子(姫路)

佳作 ⑤ 佐藤岳俊(岩手)
佳作 ⑥ 山根素蛙(岡山)
佳作 ⑦ 佐藤美文(大宮)
佳作 ⑧ 情野千里(姫路)
佳作 ⑨ 伊藤紀子(函館)
佳作 ⑩ 山本忠次郎(東京)
佳作 ⑪ 徳永政二(守山)
佳作 ⑫ 平宗星(東京)

尾藤三柳選

特選 ① 中川一(箕面)
秀逸 ② 樋口由紀子(姫路)
秀逸 ③ 本多洋子(松原)
秀逸 ④ 小野多加延(姫路)
佳作 ⑤ なかはられいこ(名古屋)
佳作 ⑥ 柴崎昭雄(青森)
佳作 ⑦ 徳永政二(守山)
佳作 ⑧ 辻スミ(和歌山)
佳作 ⑨ 岩崎眞里子(黒石)
佳作 ⑩ 河瀬芳子(高槻)
佳作 ⑪ 佐藤美文(大宮)
佳作 ⑫ 大橋政良(砂川)
佳作 ⑬ 北川弘子(大阪)
佳作 ⑭ 後藤正子(和歌山)

佳作 ⑪ 萩原久美子(東京)
佳作 ⑫ 神平狂虎(和歌山)

岡田俊介選

特選 ① 中川一(箕面)
秀逸 ② 海地大破(土佐)
秀逸 ③ 佐藤岳俊(岡山)
秀逸 ④ 萩原久美子(東京)
佳作 ⑤ 興石幸司(坂手)
佳作 ⑥ 石部明(岡山)
佳作 ⑦ 梅崎流青(柳川)
佳作 ⑧ 吉田浪(岡山)

佳作 ⑤ 情野千里(姫路)
佳作 ⑥ 柿木英一(大東)
佳作 ⑦ 本多洋子(松原)
佳作 ⑧ 樋口由紀子(姫路)
佳作 ⑨ 板東弘子(香川)
佳作 ⑩ 平宗星(東京)

八坂俊生選

特選 ① 高橋かつき(西宮)
秀逸 ② 情野千里(姫路)
秀逸 ③ 倉富洋子(東京)
秀逸 ④ 坂東乃理子(加古川)

東京都

荻原久美子

佳作 ① 本多洋子(大阪)
佳作 ② 笹田かなえ(青森)
佳作 ③ 西秋忠兵衛(千葉)
佳作 ④ 島田小吉(東京)
佳作 ⑤ 佐藤岳俊(岩手)
佳作 ⑥ 樋口由紀子(姫路)
佳作 ⑦ 矢島玖美子(東京)
佳作 ⑧ 広瀬ちえみ(仙台)
佳作 ⑨ 北川弘子(大阪)
佳作 ⑩ 石部明(岡山)
佳作 ⑪ 梅崎流青(柳川)
佳作 ⑫ 板東弘子(香川)

同床の夢つたひして雨瀟瀟
黙しては去年の柩のことなどを
忘却をことさら碧く野水仙
夜に夜加へて粉雪舞ふところ
片腕を冥府に落とす野分あと
青猫は宙からは来ず春の暮
見へてゐて散りゆく沙羅に見へぬもの
柩なるうすくれなるの実存よ
昼顔の都に熟れてゆく風と
われありと思ふ西風に吹かれるて

昭和やや過ぎて動物寓話集
白白合の謎の深まるかたちして
落花この飽くることなき銀河系
さかしまな痴情と思ふ雪柳
一番鶏啼くとき見ゆるけものみち
蒼天を風の柩とおもふべし
野菊にも不義はあるらむ春の闇
少年に姉めて秋のほうたるよ
風しばし置く白昼の佯助へ
巡礼者のやうに立つてゐる冬木

追憶の束の間見ゆる狩人よ
夜明けにはザムザになってしまふかも
淋しくて白い言葉が棒立ちに
山桜あまりに惜しみなく散りぬ
をちこちの蠅のこゑボチのこゑ
月とピエロとなんじやもんじやの話など
リルケにはリルケの迷ひ綺想曲
秋に問ふいづこより来しカメメかと
凍てついて天紙風筆なる言葉
玻璃覗くたび褐色になる父よ

秀 逸

冬木立父の背骨のままつづく
ふきのとう根雪の下で待っている
性器までさらして微笑十箇の目
鱈汁をすすり吹雪の夜渡り
長靴に雪いっぱいの炎盛り
雪乱舞肋の鬼が踊りだす
米櫃にまだこびりつく母の影
天のいちばん深いところに僕がいる
冬の斧背負ってぶらり雪渡り
眼の開いた鱈いっぴきをぶらさげる

岩 手 県

失った鏝をさがす胃の闇で
泣けるだけ泣いて農婦の野辺送り
少しづつ熱帯びてくる雪囲い
藁焼いて焼いて墓穴の中に座す
雪おんな抱き屈葬のまま眠る
駄馬の群れ伝説の闇ゆっくりと
雪明りめざす枯野の果てに家
井戸水を神棚にあげ年を越す
雪が舞っている精霊が降りてくる
太陽系の一点の花地球病む

佐 藤 岳 俊

尾氈背の裏に根雪が積っている
野仏にふとんをかける牡丹雪
冬の雲焦がして目刺しの匂い吸う
胃が痛む天皇制がつづいている
白鳥の声いちめんに冬がくる
ここだけにしか生きたれぬ稲を植え
雪虫に負け立ちつくす孤影かな
爆弾になるひとつぶの米を抱く
冬を越すじゃが芋個性の芽を宿す
てんでんと鬼の足跡雪につづく

秀 逸

流れるものの動きを止めるそれも風
凍てついたたましいたちを置く街区
ひとらつどい人形の目を見て過こし
雲落ちて傷も花火も燐りくすぶり
街中のゆめ追ひびとのいまは敗退
曇天を歩いてこんな笑顔かな
窓からは壁ばかり見え寒い花
街裏にビル林立し積もる雪
遠方に友だちがいる節分会
悪人の顔よ電車は右カーブ

愛 知 県

揺らがぬ影 行方定めぬ旅一つ
落日を明日に結んで乾いた笑み
空泳ぐものあり我らと鯉のぼり
町の窪みを知るというこの太陽
色づいているのは森と旅の人
草に虫に歓喜を降らす緑あめ
夜の港 はるか心流れきて
われら緑と一体なりし雨の窓
捜しもの日日にあり雨の窓
その一指泉で洗う永いあめ

渡 辺 和 尾

森の葉の裏に表に雨の生涯
谷下るあめ溜溜として夢を
汗吹いて天上天下すこい雨
発熱の瞬間きつと未来志向だよ
灼熱の街もからだも水を求めて
枯野とか草野とか現彷徨いぬ
塔ありぬ若き男女ら語り合つ
てのひらの小石を握る闇の中
ここまでは生き鈍色の秋のそら
白鳥はどこへ向かうか雨のち雨

佳 作

姉に生まれて午後の鏡は海の彩
たましいが這い出しそうで爪を剪る
はつなつへ全身の水入れ替える
直情佳行 夜の果実は熟れやすし
淫々と身体の内白き弁
やまものいのちと過ぎていく時間
紙の先 雪を久しく見ていない
現住所枕のなかを彷彿えり
半身は肉買ったために立っている
雪が降るレコード針はやわらかく

姫 路 市

鳥の翼をうまく描けたら着替えよう
あじさいは乱 湯槽からあがる
蒼大に林檎の芯は割りぬかれ
長女次女まだ鳴り出さぬ鳩時計
恋情は三つ折りにするにんじんジュース
生家より細胞分裂疾くなり
遠雷やなにか挽れていきそうだ
歯を抜こう王の名前を知るために
エジプトを掘りつつけていく少女の風速
裏側は胎児の形して哭けり

樋 口 由 紀 子

父の景色 敷布団ごと動き出す
真白い傘を開けば時計まわり
昼の鏡 魚の名前をつぎつき上げる
月影を追ひ越しそうで眩暈あり
わたくしの生まれたときのホットキス
息を止めると硝子の国の招待客
過去の一部に水性ペンを置き忘れ
山脈は閉じられていた手の重さ
しんしんとわがたいのかたちあり
玉葱を吊す家あり いもつと忌

佳 作

身の弱きところを蟻が這い上る
一腕の重さ湿地を父から子
臓器まだ温し濁った雪となる
かりかりと蟹の足食う喪の季節
無防備な白き喉あり星きらめく
劣情と一緒に釘を打っている
父病めり水餅深くふかく沈む
死者に盛る飯がふつくら炊きあがる
洗ってもあぶらの残る真昼の指
現し身と遠いホタルを重ね合つ

柳 川 市

なま臭く生きても指の血は固まる
蝶になる途中で息をしてみよう
残照に父立ち鶴の擬態せり
ひまわりの愚直なまでに日と契る
純潔を問う綿菓子に歯を染めて
曼珠沙華性病院の裏口に
ひかり届かず肉食の魚眠る
人の死やおとこ銀貨を弄ぶ
美しい時間魚を解凍す
平和像の指をしたたり落ちる夏

梅 崎 流 青

花は血の暗さ疑心を胃の底に
銭くさきおとこと水無し川渡る
駄菓子屋の電話夕陽の中にある
水に浮く水記憶の底に父
包丁の刃先を伝い来るものは
両眼を濡らして蟬が飛んでいった
カマキリの脚畳まれて終る乱
柿は実には父の遺影のうしろの闇
体内にガラスあるごとく膝立て眠る
梅十しが一つづつ減る命ありて

佳作

ゆるゆると花破りくる風ありて
芥子ひらら風の表に責められる
あじさいはみずいる雨の日の情意
秋寧日ゆくりくゆりと雲を脱ぐ月
長鳴きのこおろぎと澄む秋の耳
葦間の蝶きのうを脱いでいる暮色
瑠璃蝶のいのち濃くせりしぐれあと
眼帯の闇にひろがる芥子畑
花覚めて山なす哀史こぼしけり
つるつると指のあわいを晩夏流るる

岡山市

吉田浪

樹上より群青こぼる気配して
嗽々や髪切つ先ひく誰か
蓮生の乾かぬ髪をささげゆく
月光一縛に埴輪の胸抜ける
秋はひたすら炷き埴輪と野にほろぶ
思念いまひときわ青む火焰と器
瑠璃備の眉目を冥き水走る
芒野満月翳むらさきに吹かれおり
星とぶやたましいとぶや夕枯野
昏れはじむいのちのなかの萩明り
ひえびえと雨近くなる対の碗
まんじゅしゃげ一群倒し鬱抜ける
夢くずさくくらしぐれか憂しき無音
溜息のなかしんとミモザ散る
たつぷりと涕いて涕き澄むほととぎす
なみだあと不意に湧き咲く狐花
焦げついた影を出てゆく一輪車
いんいんと椿降り積む身のほとり
笛を流した草に嗽々の笛袋
葉桜やいつからひとりいつまでひとり

佳作

松原市

本多洋子

石ころと遊ぶ 遠い夫と遊ぶ
死は不意に坂の柘榴が暮れ残る
ほんの少し風震わせて男は去った
ここは何処の細道ひとり残されて
水際で手を振る 夫が笑い羅漢か
悪い冗談だったと戻っては来ぬか
炎天の薔薇ほど堪え性はない
日傘の蔭にひとつを積んで石つんで
風と歩いて風より青く染められて
結び目がするりと解ける秋のてのひら

ふいの逆縁 朝の胡瓜をもぐように
ダンスでもしろよと寛大な巨夫
風景をしまい忘れた食器棚
仁丹転がる男が生きていたように
オカリナは男が去った枯野から
月を恋してしまった小さなひまわり
私有地におろぎならば許せるか
桔梗横向きひっそり古傷に触れて
死に方を云うなら象の優しい死
生身如来に縋る昨日の傷のまま

喪の年の障子静かに張り替える
片手鍋一人で生きるのに慣れる
草笛を覚えてくれたのは味方
紙飛行機が戻らないから旅に出る
あだし野晴天とんぼは秋の如来さま
綾とりの朱けの吊橋渡ってひとり
哀を沈めて 目線より低い生垣
木馬昇天こぼれた萩を背にのせて
星の見える駅ならふらりと降りようか
ピエロ一人残ったてのひらの祭り

佳作

香川県

板東弘子

水の邑 行きつく先にあるランプ
亡母と流れて幾夜を越えて人形や
水仙傾く 水の快楽な
亡き母の影より重く石を積む
石積み飽けば疾うつ風童子
真夜の音拾い続ける我が枯れ野
裏木戸がかたかたと鳴る血の渴き
庭の木の細りに細り焼る亡父
野も風もひゆるひゆる哭くか返し馬
瘦身を深く沈める月の椅子

船の軋みか亡父の声が遠い潮騒
凍天をかすかに啼くか掌の空洞
同胞の裾にからまる幽い霧
秒針の音澄む父の野は枯れて
道標は風化を止めず蟻にも影
鈴の音もゆっくりと行く我も旅人
白菊のその先にある長い橋
旅人の木の下に棲む風仏
憎い男が眠る卒塔婆傾けて
女は闇に怨と書いては軀を濡らす

ひとりの家の暗がりなれば病み上手
父を呼ぶ風か瘦身の木を揺する
庭の木の凍天を押す子が発ちぬ
風はかすかに絵馬を揺さぶる神の使徒
日脚伸び梅一輪の盲い妻
何もなかったように独りの戸を閉める
旅は終わりの手からこぼれる錠剤よ
供花白菊 運命論の是非非に
冬から春へ窓に始まる青いシナリオ
鎖緩んで蝶の羽音が澄んでくる

佳作

西宮市

高橋かつき

くちうつしされているのは月光か
いつだって給水塔は孤独なり
水仙の芽ははつきりと意思をもつ
言ったって仕方ないこと牡蠣の殻
春愁の空を見上げて空を見ず
かきまぜる卵の殻をいれたまま
雨の日のわたしがうつらない鏡
水平線みつめて諦めに近し
藤の花白さに耐えているような
枇杷青し危うきことを口にする

青田風この世のものでないような
素直だったのは六年前の夏
無花果がびっしり悪いことしたい
百合ほどの存在感もなく黙る
ソーダ水恋もおわりに近くなる
たらたらと麦茶をさますための水
夏野菜水全開にして洗う
豊かなり海に近いというだけで
自転車にはじめて乗れた日のように
闇新鮮つぎの花火がひらくまで

受託児童くいつもあなたが置いてから
ひとり泣く愉しみのある片思い
どうやってあやまるうかと書いてある
疑っているわたしの冷たい指先
切手貼るぴたっと揺るぎない位置に
ひいらぎの香りポストに行く途中
疑いは断定となる冬の雷
話し中あのひとはいま生きている
泣いているようにも見えない窓ガラス
わたくしに競争意識もつ月よ

佳作

姫路市

情野千里

求愛やジャワの蜥蜴が鳴くように
春の淫きんちやく袋縫いあげる
夜の符牒となりぬ紅梅白梅図
ひいらぎや色足袋よりも隙だらけ
耳は聖域かぶらを干に刺むとき
美男かな綿のはみ出たどてら着て
助席に置く蒼白のオーガズム
重なるために男は骨を二本折る
目殺をザクザクと踏む朝の葬
アネモネを挿して無頼の妻となる

ひと暴れして来た夜の桜風呂
春の暗算 椿油が減ってゆく
爪跡の痛みと眠る椿の根
龍の巣はたぶん風呂屋のそばにある
放し飼いわれて百万遍の嘘
好きな人が笑ってくれるから転ぶ
ひまわりが咲くいもつこの地獄耳
酢昆布と家守に親近感を持つ
散るときを助六風に塗る
殺されに帰る男へ拍手喝采

マザー・グースは男 真水は酢の匂い
残暑かな男に走るゴム草履
茄子の棘を抜く不純なる時間
蝶は肉声 男は斧をふりおろす
糸瓜ぶらりと揺れて避暑地の情死体
土八夜や柘榴を二つ盗むべし
北極点が緩んで鞭がとんで来る
排卵の狂いはじめの月見蕎麦
おとつとを攫う氷の馬車が来る
うつむいて酒舐めるとき冬の蝶

佳作

名古屋

なかはらしいこ

紙の花切って散らせてわが祭り
旋律が聞こえる森の奥へ奥へ
温かな手負いの獅子の顎の下
劣情のこぶし開けば藻の匂い
あくにんのうすももいろの骨愛す
默契や明日に向かって透ける水
ごつごつと風鳴る堀の水を飲む
生きているものは美し解剖図
陣痛や神話は語りつがるべし
一枚の誓紙 黄ばんでも誓紙

神さまの水 青くなる 赤くなる
回文めぐる淋しがりやの膝あたり
男の理想女の理想長い梅雨
腹を裂く私と魚の甘いとき
懈怠かな ふるふるももいろのはなびら
人形の黄ばんだ衿ともつれあふ
わき腹に籠もる虫の死臭かな
やはらかき白湯飲む神に出合わんか
柘榴含めば禁忌の鐘が鳴る
密約ひとつ 心臓の音 川の音

星屑えて十萬の口がさみしが
臥待月 雨後の背骨は柔らかし
供養かな ふわり綿虫舞いあがる
隧道を抜ける頃には鎮まる血
夢の断層 白い葉がはさまれる
折れ線のとおりにたたむ古い地図
しずくしてしずくして君 鯨になる
台風一過私は鳥を産み落とす
腐乱する梨はあなたへの訴状
胎内で薔薇散りはるかなる汽笛

佳作

青森市

福井陽雪

空を飛ぶ鯨は僕のアトである
太陽が眩しい生きていけそつだ
雀雀山ほど話すことがある
寂しくて人の形で眠れない
ひまわりがいつぱい兵士還らない
父が逝く夢の続きを見るように
腕一本あるから万歳させられる
被爆絵のように紫陽花枯れるのか
千匹が鳴いても鳴かぬ虫になる
和太鼓を叩くと僕の音がする

闇の手の鳴る方の逆へ行く
暗闇にカラス安心して眠る
さよならの文字は冷たい水で書く
あなたこそ鬼であります桃太郎
こんなにもトマトが実る三回忌
負け力士僕によく似た顔になり
窓際でカラスを見ている生きている
一本のたんばぼ闇をあたたためる
人間の形で蟻が死んでいる
千羽めの鶴に生命を吹き入れる

寝返りを打つと聞こえる闇の音
裏切った瞬間被席席にいる
残像をかさぶたにして去る人よ
寂しくて人差し指を立てている
鉄板の上で焦げてる僕がいる
裏切った私の背中見なくなる
杖ついて帰る友あり満月よ
昨日まであんなに笑ってた生命
死者がいる部屋の時計がひとつ打つ
裏切りに一本の釘落ちてくる

佳作 「胎内音楽」

大阪市

倉本朝世

風上に置くまっさらなインク壺
藻畳のあわいの水よ少女期よ
灰白くいもつと光る中洲かな
星屑えてわたしのための深い穴
月の部屋 未生の兄の青い靴
失くした膝と何度も擦れ違ふ童話
分水嶺を軽々と越す白い布
春の道光り人畜整理す
形なく音なく籠の編み上がり
ジュラ紀から吾子戻りくる夜明け前

転生や王家の谷の生あくび
菌並びをきれいに治す雨後の森
絹街道でゆりかご軋む受胎かな
布を断つ未知の平野に光射す
乱数を原野へ捨てる深呼吸
フラスコがまた触れあふ胎内音楽
くすくす笑う星の夜の大巨間
金盞掌にあり音の降りやまず
対岸の柘榴の青に寄り添わん
樹の息に吹かれて宿す波の音

力ある水受け継いで山を見る
母の名を三つも知っている鮑
たましいを重ねて眠る潮境
呼び声に五月の海図掲げたり
照る池を這い出す二年後の私
小気味よく砕けて大地見え始む
繻帯を静かにほどく誕生日
縫い針をかざせば空に通路あり
心臓のまわりの長い道草や
産声となりゆく真昼野の薊

佳作

名古屋 市

吉田 三千子

夢しぐれ 髪の匂いをもつ一度
髪に触れば馬蒼く横たわる
落葉松の道は落葉松の音で日月
ひとりぼっちにならないための葉塵
けだし世の夢は酔うほどに痛いよ
反芻や からたちの棘バラの棘
帰らねばならない胸へ逆さ眉月
人の名を一度は呼んで冬籠もり
いつか埋もれて攫われるなら目に
波の言葉がいつも遠くへ連れていく

サンドブラスト その絵の中に人を置く
美しい嘘を煙らす浜木綿 白
十三夜 骨の欠片の熱さに狂う
カラカラ約束の音がする 肋
この雨に反らせる骨や 虹
水浴をしていた数分前の 獣
もつ二次元の世界を黙るな 君
哀しいほどの寒さの中へ砂が降る
囁きのしずかな闇は温い桐の木
こんな寒く木まで歩いて人になるらし

晩秋初冬 花梨の吐息近づける
共鳴音楽 うっすらと霧が降る
屋の月の浮遊 未来としよう
極限の指にたやすい死でありぬ
陰影を解かせ 柔らかいリボンなど
耳鼻古頭を嗤ってふわりふわり
別れ以後 黒の視野から逃れずに
響きゆく どこまでも黒のハープ
痛い半月 猫の目になりそこね
秋の水 夢の規律はみごとに苦し

佳作

東京都

倉富 洋子

絹のシャツひんやりする春が来た
やわらかな沈黙そして恋になる
屋下がり人魚のように湯あみする
はらはらと帯解く花が散るように
かさねあう影 現から遠い位置
桜闇このまま堕ちて蝶ふたり
さざりさざり髪梳くように嘘をつく
わたくしがしずかに腐る冷蔵庫
手巻き寿司疑い太く芯にして
わが手首切れば真紅の薔薇いちめん

ハイヒールのかかとを叩き折って、春
はたるにぎればわたしよりつめたき熱
愛はある 腐るほどある 腐っている
きりきりと涙の洶れる音を聴く
向日葵の黄黄黄黄黄黄黄 孤独とは
主婦と一括りにされている真昼
いつか凶器になるビール瓶冷ややす
本日は快晴すべて許したし
正午のサイレンが聞こえる 生きよう
湿りたる花火よ夢は夢のまま

古い血を抜くようにただ泣いている
この恋の贅になられたし湯を浴びる
破廉恥な女であるか曼珠沙華
さよならの手紙は簡潔書きにする
髪きつく編み込む女ゆえの鬱
ざっくりと手首に月の思い出よ
白き乳房 出逢い別れてなお白し
夜の密度が窓ガラスを濡らした
三十歳ガン検診の紙の色
河童忌や真夏の死まであと一步

佳作

加古川 市

坂東 乃理子

いいものをあげよう蜘蛛を握らせる
一日に漢子を少しずつ忘れ
淋しいか小鳥人語をよくしゃべり
自転車で少し遠出をするいのち
忘れ去られていても見事なバラの花
眉のないおばさんとても人気者
納戸からつるさい物があふれ出す
待つという行為今でも大嫌い
めまいするごとく四月が過ぎてゆく
「持ち帰り下さい」とあるいのちかな

待ち人は来たららず雨が降ってくる
入梅やつまらなそうな犬多し
ぼうふらを飼うそれなりに楽しい日
草木にも品というものあり真夏
人間はわたくしだけか立葵
よく見れば金魚呪文を唱えおり
ふいに秋 髪は薄さに驚きぬ
父の背中ではんまの緩む音
手の届くところに青い柿がある
天高し蟻は不死身に近きもの

わたくしの骨が鳴る鳴る秋の中
青い空見たまま死んでいる小鳥
さりげなく愚子のように目立ちたし
包丁を片手に夕刻の電話
雨戸閉ざして死ぬ一步手前の日
山鳩の同じ時間に同じ声
生まれつきまるくはなれぬぞうり虫
便器一途に磨いて気持ち落着かせ
疑ってしまう目覚し時計まで
赤ちゃんの泣き声はるか昔から

佳作 「起点」

黒石 市

岩崎 真里子

カラカラと骨ムクムクと夢曼荼羅
たんぼの真白き宇宙母の髄
母の背よ 魚の骨よ 荒磯よ
一枚一枚母をとどめて骨透明
この檻を出れば霧散 砂の母
眼光にいのちあふれて母は病む
瘦せた餌をこぼに冬の頬袋
寂しさを言わぬ背中母が匂う
花が降る静けさが降る壺の中
祈られて光るせつなと母一切

光よりまぶしきものに母の骨
朱は総て外に置かれて冬の塵
雪音に吐息がねむる夜の掌
風になる木端微塵の蝶とんぼ
雪掘って掘って掘っている私
あだし世のまんまの中に母といた
人形の瞳より指より薄い日々
暗闇を燃え来るものよあれは母
点線の記憶くるくる母心経
花から花を母から母を慣う時雨

縄一本ゆすって母を試される
作務の道トボトボと茄子の花
結び目は皆ほどかれて風は手占師
つらら滴々請うは蒼なるひとにぎり
崩れゆく力 わたしは元気で
この星にこの世をひとつもつひとつ
ひとつからひとつを生んだ春のやわらか
雪解けの番となつて菜の一本
わたくしを下さいますか ズーっと空
風は空から今日は海から人のはじまり

佳作

刺刀が喉元にある蒼い夜
火の酒を呻る化石の町にいて
峠を越えて古い時間に会いにゆく
切株にゆっくり座る調律師
雨上がり森のエロスが甦える
蟬のいのちも僕のいのちも熱くなる
体内で消える銜を追いかける
夕焼けを集めて筏流される
深読みの茶碗が一つ伏せてある
暗い絵の中で安らぐ売娼婦

土佐市

人形の首が抜けたら発狂す
相聞歌バケツの底が抜けていた
八月のグランドピアノ雲が湧く
輝きが少し薄れて世に慣れる
生卵黄味が崩れている喜劇
脳天に毀れた箱が積んである
したたかに生きて吐きたす梅の種
父の荒野に指が一本ずつ殖える
柿の木の天辺にある武器工場
傷ついて鱗一枚手をこぼれ

海地大破

臍の緒が痒くて亡母を思い出す
橋桁に怨念ひとつ絡みつく
発狂の皿を一枚沈ませる
はにかんで花粉まみれのままで死ぬ
てのひらの灰は確かに生みの親
僕の骸をボクがやさしく抱き起こす
丹念に並べる父の背骨かな
顎の骨たった一つの未練かな
朝顔を咲かすわたしの頭蓋骨
私の横で眠っている仏

佳作

デコレーションケーキにさみしくのっている
宿命を背負うきいろもむらさきも
泣き声が聞こえぬようにラップする
風景の片隅 青い実をつけて
せいっぱい棘のある木を繁らせる
流し台の下の湿りの中で眠る
走りながらうしろに捨ててゆく景色
声がしたように曲がってしまつ角
迷子放送 私の名前呼んでおり
地上の音が聞こえぬところまでのぼる

仙台市

夢を見る 足の壊れた人形と
船を待ちながら小さくなってゆく
もつと向こうへ行きそうなので呼び止める
私のガラスケースの中の都会
美しい布を裁ち違えてしまつ
残さず拾う手の指足の指
病室に空の画集と閉じこもる
何もない箱だけ開けてしまつのです
待ちました 死にたくなってしまつほど
夢の出口 コートの襟を立てて出る

広瀬 ちえみ

暮れてから物置小屋のものがし
こなごなのガラスの鳥を掃いている
友だちに見せる去年の手術痕
埋葬が終わリテレビをつけてみる
円陣の中に三人だけになり
一本の虹を家族の数で切る
鳥たちが帰る静かな方角よ
まんまるい月だ 瓦礫に腰掛けて
春の机に静かに置いてあるナイフ
青空を見上げる樹液にじませて

佳作

われわれの時代の比喩が煮こぼれる
じゃんけんに負けた拳と流される
犯人を知っているのは桜だけ
鉛筆の濃さを競って他人ばかり
好きな絵をゆっくり煮込む妻と二人
逆転の風送り込む不等式
満点へ愚かな石を積み上げる
下手なうそ上手な嘘も血多彩
コスモスに問えばさすがに風動く
妥協点見出し出す帯の長さかも

大宮市

かめかめ一人余った花言葉
頑なに猫背の視野を温める
言い訳ばかり重くなる広辞苑
八方美人のてにをはが舞い上がる
正論という歯並びのいい若さ
一票の軽さへ風を積み上げる
好きな絵を一枚残し私を燃やす
弁解はしないよ皿は白いまま
適量という軽そうな辞書ばかり
夏終る陽焼けも恋もミデアムに

佐藤 美文

夏のバロディ愚直を食べ飽きる
間違いのままにしておく荒れた海
自己主張ばかりしたが花言葉
空際でいつまで眠い地蔵様
各論の皿に多彩な他人の過去
少し厄介な正直者の傘
橋渡る勇氣もなく花多弁
父の膝までは紛れもない海だ
何通も手紙を捨てた梅雨半ば
鏡の中で古い手拭いが乾く

佳作

冬のトマト人間の手がうつつしい
潮騒に染まる鴈を殺して 来たが
心太閤一枚を軽く着て
ふたたび強い割箸ふいに横たわる
鍋の底の湖の蒼捨てたのか
よこれ切るため白蝶の白ひらひら
さくらんぼ種となりゆく獣の口
そうめんのまっすぐ喉につまらせて
殺してくれ殺してくれと毛虫湧く
新樹から逃げる兵のふくらばぎ

青森市

気がつくときサカナであった魚を掌に
天折の豆腐を箸でひょいとひょいと
とんぼ死す 目玉に百の空残し
真実がごろごろあつて蜚の死
蛙の子ひとつの壮大なる喜劇
昼寝から覚め切ったとき箸二本
捨ててある名刺に海の匂いが少し
電柱からしたたる汗のごときもの
炎天に闇を偷しむつまようじ
枝豆の殻乾き切る前に捨て

野沢 省悟

掌の茶碗ときどき海へ行くらしい
さざなみの夕陽雨腕原
秋の雲映すてのひらヨットにならず
指人形の睫毛を拾ってくれませんか
AIDSあるいはりんごの紅とかくれんぼ
落葉となってちんぷいと化けられぬ
木枯しを腹いっぱい食べたから
空を飛びりんごが一個こめかみに
おでんの具といちにち語る遊び人
さて、そして大根として干されている

佳作

青森県

柴崎昭雄

向日葵の柩が動く 少年の汗
落魄のてのひらにある茄子の馬
太陽の乳房 おとこの破滅願望
冬の斧ざくりと白いゆびを断つ
真夜中の部屋の隙間と柩のすきま
神様ノ足ハシヨッパイ味ガスル
寝不足の視野を横切るコロンブス
火の匂いしてから込んでくる花屋
火葬場の煙が伸びる 神の陶醉
八月反転 蒼い涙がとまらない

遠花火 母がまといし風の帯
耳たぶのやわらか過ぎる 母の微熱
坂道を転がる母のトマトだ
母の手がある父の手がある柿の種
雪を嗅ぐのははの乳房のあたたかき
静寂の夏の洗濯物を覗く
最後まで刻まれている種無し西瓜
掌に残る蜜そそろ身籠もりぬ
道化師のズボンの裾にある夕陽
日葉をさしてかすかな悔いがある

駄菓子屋の隅の花火が熟れている
大器晩成羊がぐつぐつ煮えている
冬銀河 傾きだした父の椅子
花は花で終わる 多くの司法解剖
纏うものがないから一つの死体になる
泣いた男の影がひらひら揺れている
地吹雪の踏み絵がぼくの貌にある
ちちははの明かりがつもる不肖のゆび
モミの木よ母の緑の濃さほどに
運のない男が雨に溶けてゆく

佳作

東京都

平宗星

自慰する蜜淋しく光る棺のなか
ぼろぼろの箱に故郷の杭がある
喉もとに鋭利な斧を秘めて研ぐ
駱駝のこぶに誰も知らない海がある
胃袋から家出するボクは麒麟だ
山ノ手線に少年Aは鳥放つ
湖底から父の太鼓が鳴り響く
母音の樹はげしく揺する少年期
好きだったあなたを想う泣き墨子
能面の裏で泣いてる親不知

夕焼けでたましい洗う鴉たち
犀ばかり飼う手品師の白昼夢
シャガールの馬に少年青く病む
蝶ばかり追う冬彦の遠眼鏡
逃亡もできず小さな蟻でいる
ポケットの穴に小象の日は暮れる
血族のさくらひらひら嫁ぎゆく
マンモスの性器がほしい四月馬鹿
くちびるを奪つ まひるの産卵期
火の姉と黒髪のなか溶けてゆく

血管の中を無数の蛇泳ぐ
初雪のおんな疑う逢えぬ夜
裏切りの舌にシンバル鳴り響く
空から落ちてくる哀しみのひとひら
駅のない鉄道を歩く犬である
陣痛の鯨の霧笛鳴る孤独
てのひらの一期一会の鬼が哭く
やわらかに化石の魚呼吸する
今日もまた未元の死体で生きてゆく
枯野ゆく影一列の去来抄

佳作

黒石市

千葉風樹

空を斬るだけの鉄が似合って蟹だ
孤島なり我が体内の臍の位置
うどんのつゆがはねて男がひとりの夜
この世にちょっと居候して飯を食う
神様のオモチャの中のひとつだなあ
人間の川から一匹出世魚
栄転の日の孤独な便器の白
おむすびころりんそんな話に似たゴルフ
晴天の野にぼくも居る鼓笛隊
或る日駱駝は見ていた橋を渡りだす

帰ってと云われた薔薇をどうしよう
納豆の糸に妻の名付けようか
ああ浮気バレルお猿の真似しちゃお
名月や背中にバカと書いた妻
合掌の手の中にある夫婦著
世界一きれいな妻の指きつね
胎児動いてチロリン村に朝が来る
嫁ぐ娘よ青木ヶ原の樹海だぞ
いわし雲海で死ぬ子はもつ産まぬ
おんなの目覚しが鳴るモノクロの津軽

無条件降伏せよと雪の斧
この冬もオカリナ一個抱いて妻
いちたすいちはいちだと父の靴が減る
死前夜の父がおしやべり好きになる
千羽目の鶴がカラスに勝った朝
あ・ん・ら・く・死と桜笑って散り落ちる
サイクリングの列が行き交う野辺送り
足首の回転ばかり見る葬儀
鏡の中の死者を見ている曼珠沙華
終章はでかい空き缶だけ描くか

佳作

大阪市

北川弘子

新興の街で走ってばかりいる
ビルの外は誰も遊ばず陽があふれ
携帯電話に飼われはじめた犬である
影のないエレベーターに身を入れる
いっせいに私を見る花畑
華やかな行列にいて 寒い
てのひらに何を握ろう吾亦紅
トマト派サクラ派相討ちの川にいる
紫陽花の闇には闇のうずくまり
ユリカモメ手先に舞えば淫らなり

浮遊物の中に私の市場籠
妻という鑄型ころされそうになる
長い髪やがて打たれる高となる
固い椅子女二人で泣きしこと
花筵親しき人の声を持つ
今日も見る波打際にある死体
爪を剥ぐ勇気わたしの悪として
大車輪軌む時計を直さねば
渾身の馬美しきセピア色
混濁の池のほとりで熱くなる

多すぎる杭を抜いてる月の夜は
朝まぶし失ったもの忘れゆく
古本の埃を払うページごと
澄み切った水がノートに沁みてる
雲白し一歩登れば一歩の坂
仰ぎ見る白い山には白い意志
終着駅のドームで放つ青い鳥
身の内海荒れ始む汽笛鳴る
黒い枠嵌めるとあざやかな過去だ
おめでとつ私の死に年月日

佳作

函館市

伊藤紀子

斑雪匂いのうすい葱の列
遠景のサクラもがいても雪の村
春宵よ刃物をしまつ火を落す
父呼ぶや厨の棚にねむらぬ腕
血縁の声汲みにいく水の森
奥付に姉の名がある水物語
産声よ水の記憶を曳いてくる
本草図水を欲しがらわたしの位置
種千袋その暗がりのレジスタンス
地の塩や少しの水に躓きぬ

水草が一途に茂る女人講
花の季の放心つづく厨ごと
猫道をくるイカ売りの朝の念
ひとの目に切り岸があり沙羅双樹
どくだみの一花苦行の容して
ゆびさきに霧の生まれる岬伝説
Z旗はたたまれ麦畑に麦
韭の花大根のはなひとり言
木のベンチ愛を百年問うている
瀬戸物市でおりあう一夫一婦

花栗をゆらしひとりが逃げてゆく
娘を発たせ市のヒマワリ攫いたし
ソバの花母の沖ゆく引揚げ船
しあわせは一重でいいよ秋桜
花荷おろして少し反り身に生きてみん
種草をひろい続けるながい黙
稲架のむら一身上をいいつのり
豆におの嵩が鎮まる霜前夜
寒行の群烈烈と闇
淡淡と継ぐものがあり雪の門

佳作

福岡県

松永千秋

在ることの問いかけに散る枇杷の花
秋に届いてしまふ私の長い影
鳥に生れて鳥のことばで愛し合う
胸中に鳥の渡りの絶え間なし
風景が動いて行っただけの旅
わたくしが逃げないように打つ杭だ
ひまわりと視線が合ってしゃんと立つ
木を抱いて森の一樹にならんとす
愛は哀は生みたて卵掌に温し
肉感のじんわり重し青魚

恐ろしきかな魚肉獣肉皿に盛る
肥満したカラスと呼吸が合って来た
哄笑や舌出し遊びまだ続く
人間を包み切れない布の哀しみ
生きている悲哀が象につきまとう
哀感のするめ焼かれてくるりと踊る
かなり雑多な鳥獣戯画の中の哀
きのうも今日も父の帽子に月落ちる
月の下父の汚したものの洗う
あつけらかと父の洗濯もの乾く

涙の味のするアンパンを食べている
バロック音楽からりと晴れた波が来る
花菜いちめん静かな乱のありぬべし
まなうらの椿が消えるまで洗う
やがて痛みに溺れてしまふ紅い布
私の乱くちびるが熱くなる
子守唄泣く子は流せ裏の川
時々水乞いをする桜の木
戦死者の中のわたしのおばあさん
平和とや蝶よ花よの乳母車

佳作

姫路市

小野多加延

おなじ鳥が冬の岬に飛んでいる
兵は老いる二月の空のアドバルーン
置くこと多く切符が見つからぬ
真夜中の他人の家で皿洗う
捜すもの出てきて冬日昏れかかる
軟弱でもいいさ焼いもを喰う
住む町に羊羹屋あり老いていく
純愛という形のある冬の手袋
扉が閉る わが齢を数えそこねて
ぼくの柩 天井の低きに馴れる

大きな掌をさし出してくる小春日よ
ためらうな回転ドアに映る老い
野辺は春 メッキ工場いそがしい
しげろくは干潟を独りパレードする
熱心にメモ書きとめる此の世かな
飛行船 迂闊なことが多すぎる
ポケットが膨らんでいる今日の稚氣
れんげ草 遅れて歩く棺のあと
哀しみの象なんべんも水浴びる
指に付く花火の匂い 死後おもう

路地裏の死者にかわって水を撒く
八月を語ればいつも飢餓の島
読み違えた恋は天気図 水溜まり
ひとつ問えば満天の星とと降る
何処に居ても水音がする恋人よ
湾岸がせりだしてくる肥満かな
月光の波打ち際に捜すもの
遊び呆けて早や夕刊の入る頃
ごま塩の髭剃り残すいのちかな
わたくしも表現者なり大落輝

佳作

堺市

海堀酔月

蛸壺が動く 蛸とは限らない
殺意はないが手頃な棒を探してる
横に振った首がだんだん冷えてくる
すれ違った電車にぼくが乗っている
坂を転がってゆくカラフルな毬
ゆっくりと骨を溶かしてゆくラルゴ
神様にしては匂いがきつ過ぎる
そして女は象より重くなりました
こつてりと漫画を塗る朝のトースト
円形が少し崩れて風になる

空缶を捨てて華麗なセレモニー
余った図書券であの世を買ってくる
逃げた魚から絵葉書が届いてる
汚いハンカチで顔を拭いてくれる
少しづつ曲る通い慣れた道
低音がことさらしみる 意識の亀裂
二十五メートルプールの可哀想な思想
ブランコが揺れる 言葉の届かぬ世界
終幕を端折ったマダムバタフライ
空缶が見ている空缶の踊り

白旗に似てるがこれは冷や奴
迷わずに三度続けてパアを出す
合わせ鏡がずれて鼻の奥が濁く
背泳ぎも上手になった離婚歴
過去を洗って水のない盥
信号を無視して通る笑い草
生煮えの鍋かき回すワイドショウ
狸の助走で狐が走ってる
リボンがよく似合ってるむし歯の犬
木の葉が流れてゆく わたくしを乗せて

佳作

大東市

柿木英一

日輪へ揚羽立つ時神を見し
夜の青梅さんさめく水子の舌
夕闇の私語花合歓の脳外論
供花は一輪鶏頭の朱の差別
宙吊りの蜘蛛刻まれる砂時計
不在時間に落ちた不連な青林檎
罪状認知の宝石箱を開く秋
献血の炎暑の街の珈琲飢餓
わが死海火を噴く艦隊浮上せよ
直線のための曲線の泡立つ舞踏

佳作

千葉市

西秋 忠兵衛

解放はバン屋のまえではじまった
放置自転車 レーニンと書いてある
ゴルフの靴が落ちて河川敷
チンドン屋がおった砂漠のあしあと
砂漠の絵 ラクダの片眼もどらない
PKO どこかで皿の割れる音
ガム噛んでPKOを見送るか
デモ隊の帽子が走る過去の街
世界観もベニヤ板もきれいになった
ニシン不漁 江差道分は砂の匂い

原発の村のあかるいセブン・イレブン
鉄塔の影がかざる休耕田
Gパンとどこで決れた野良着の藍
麦めしを食つと敬礼したくなる
ありがとう お櫃の底のごはん粒
吊革に見事にならぶ人柱
雑兵の地雷を踏まぬ足の裏
年金法の巻末にあるカラオケバー
バブル崩壊 肉屋は肉を切っている
産道に行くからっぱの乳母車

文楽の首がころがる防波堤
トウキョウをボタンと閉めるコインロッカー
宰相の鼻テカテカと無題の絵
ダウ下落 踊り子号は定刻に
眼鏡屋に這入る浅沼稲次郎
まっ白なしんぶんを売る未来駅
ソマリアの夕日が落ちるスープ皿
パンの木を百本描いている砂漠
缶コーヒー 軍手 俺には俺の秋
洗面器の底のあいとと生きている

佳作

東京都

矢島 玖美子

今日だけは一緒にいよう 外は雪
クリスマス・ツリーにもある一人用
逢えぬ日の予定を隙間なく埋める
贈られた白いマフラー白いまま
もっと寒ければいいと思う ひとり
軽くなる 傘をなくした日のように
降車駅を毎日忘れない 何故だ
終点のない地下鉄の客となる
わたくしを廃業したい晴れた朝
犬の死は犬の死として見つめおり

ひとり抜けても回り続ける遊戯の輪
エクスタシー 高層ビルを見上げれば
箱詰めになされてどこかへ連れて行かれる
東京で親のない子のように住む
うかつには返事の書けぬ手紙来る
花冷えを甘えることの口実に
七夕や逢えないことに慣れてゆく
留守電を居留守に使う 雨激し
口紅の色を変えてはひとりかな
夜の秋 逢いたいけれど逢いたくない

佳作

守山市

徳永 政二

炎天へ乳歯ぐらぐらさせている
食べながら話す死ぬとか生きるとか
鍵かけてきたかと思ひ顔をする
アイロンの先と明日を考える
わかりません好きな言葉の一つです
もっ少し明るく皿を洗いたい
満開の桜も途中なんです
青葉若葉女が髭を剃っている
一年生走って帰ってきたと言つ
森深く卵をふたつ抱いている

風船を子供にもって帰る雨
一本の木から汽笛を聴いている
通勤車枯葉舞い込むように乗り
雨が降るので傷んだ靴を履いてゆく
住みなれた部屋ですいかの種を取る
魚屋にきちんと並ぶ魚の目
三日月を頭にのせて帰る父
紅葉ながめてんぶらのことと母のこと
父さんの穴へ子供を連れてゆく
水族館少し悲しくなっている

もう夢の話はしない兄といる
おがくずの中でかすかに動くかに
十二月欲しいオモチャにまるをする
大根を十本干して昼寝する
兄ちゃんと金魚の水を変えている
ゆっくりと渡れば母に逢えますか
にわたりの墓少年の水を吸う
弟のやせたことには触れぬ兄
無口だが鍛えた声を持っていた
子が歌う虹を渡れば夢のまち

佳作

高槻市

河瀬芳子

結び目の解けないように傘をさす
盗まれたくてありったけの私を並べる
さわさわと祭りの通り過ぎる耳
錆びた鈴と身の上ばなし長くなる
かんぜ縫り直立 母のいっぽん気
金魚反転けだるい午後を裏返す
逃げた男を捜す 洗面器を覗く
神さまに叛いたことのある乳房
額縁の中で転んでいる父よ
宴終ってますます太る火葬場の煙突

残高を数える屈葬の父よ
着ぶかれて戯画の街から抜けられぬ
開き直っている連のないてのひら
さざ波のやがて激しき物忘れ
沸点はあっただろるか父の椅子
象に聴いたとおりを泉へと急ぐ
ありがたい柱で虫が喰うている
ポケットの多喜二と闇を分かち合う
風になりたくて少年火を焚けり
竹箒の立てかけてある冬の入り口

日めくりにわたしひとりの祀りごと
木枯しに呼ばれひよいと従いてゆく
老いの鏡の波立つものを裏がえす
定型へすんなり落ちる微熱の耳
さりげなく置く男からの手紙
葛藤をいくつ視たのか水呑み場
水をやっているのは悪の木わたしの木
さくら散る やつと赦されたとおもつ
柩を送る ブランコをおりて
紙飛行機の返事もやがて届く頃

和歌山市

後藤正子

雪が湧くまでをポストの陰で待つ
懐いだそうと水音ばかり高くして
澄むまでの深さにわたくしを沈め
微睡みの果ての木霊を聴いている
島は今もわたしの耳を遠くする
土の中から聴こえる遠い日のことは
砂時計を見ている冬の漂泊者
雪の日に見つめたものを身にまとう
無造作に色があふれてくる日暮れ
箱を開いて水の在家を確かめる

風冷えの掌から激しさを雫して
空が澄んでどこまで歩くわたしだらう
袖通すたび新しくなるわたし
木に星を飾ってしあわせをさがす
心行くまでの炎を高くして
弱い影をさぶさぶ洗っている月日
捨てるものなど無かった深い穴の中
ぬくい掌を曳いて現在置を捜す
夢ばかりみる真夜中を往き交うて
失うほどの痛みを秋の灯に沈め

月の夜のためこ哀しくて白い
菊剪って思いひらきををのひらに
疾うに忘れなない科臼を振り返る
わが胸に余る月日をねんごろに
小さく折って痛みが過ぎるのを待とう
野あさみが誘う流れる音の中
水音が耳に還ってゆく旅に
果てのないざわめきを聴く樹の真下
琥珀の中に息つくものを沈ませる
身の上に降る雨音を視野におく

佳作

砂川市

大橋政良

絵の精がじいっとこち見ているぞ
パレットを開けると黒い十二色
尾の先で嘘の景色を描いている
ポケットの芥哲学を持っている
川のない橋に戦車が置いてある
指切りの嘘しゃっくりが止らない
玉手箱火葬の煙りかもしれぬ
わくら葉が上手に泳ぐ水たまり
裏切った磁石やっぱり北を指す
光らない蛍が水を飲みにくる

泥舟が沈まなかったある神話
絵が死んだ主役が光りすぎないか
変装を解くとざわめく水たまり
糸図ひろげて南瓜の臍を論じあう
カタカナの美学が風の街にある
脳外科と立看板のある景色
旅に出る自分の描いた絵の中へ
札束に切られ獄門首となる
嫌味たっぷり四月の雪が降る
生きさまの一つにばうふらの踊り

矢面に立つ装束も脳も 白
近景の中に脳病院がある
酷使した脳から山火事が見える
闇の底から挑戦の手を鳴らす
豆のつる姥捨山は混んでいる
地下街で蟻の絵本を買ってくる
カタログで切られた首が吼えている
楽しみがある雑兵の白い部分
この絵だけ売約済の札がない
未来図にブランコだけが揺れている

佳作 作 「白い原風景」

高松市

大谷晋一郎

石投げて石の音する 泪する
芒野へ振り向くことのほか性は
枯れ野はじまるブランコの上に
芒得し掌にたちまちに父連れて
芒野をぽかんと口に雪が積む
重なるように蝶の屍と眠りたし
歯が抜けて河原のまるい月拾う
キリキリと痛む枯れ野と抱き合えり
おともにも話さぬ駅がある枯れ野
月光下われは芒の案山子なり

芒折る柱時計も雪になる
マツチ音八か仏の眸と会えり
雪原に佇つも熟りのあまりある
水乞えり集落の芒へ一夜乞う
薔薇の棘抜く放浪の血の彩に
昏昏と雪 細胞に雪が降る
笹の雪耳なき法師居わすかな
爪落とす爪の重さを沈む雪
雪こんこ狂えることの愚かさに
化野や真一文字の冬火花

こめかみに冬の火花の点在す
嘶けば冬おんおんと陽が昇る
小面が吹雪いてならぬ冬火花
冬銀河火花を袖にかくし持つ
星が降る枕を白い蛇になる
汽車が出て冬の火花を嗚呼と吞む
昏れて冬 波止場を握りなおす指
冬の野にあらんばかりの鳥ことは
背後から鳥らの白い息吹かれ
雪原を翔びたつ白い水時計

佳 作

坂 戸 市

興 石 幸 司

てのひらに火を恋う今日の血は凍てて
我を断てよとや野吹雪の荒涼は
揺れ惑う夜は胎内に眠りたし
影を負う身の朽ち船に火を放つ
悔いいくつ澄みとおる身を持たずいて
曼陀羅を抱いて平らな夢につく
こころ天馳せれば春の風立ちぬ
煩惱もよし君まだ蒼き土にして
苺齒に染む読まぬ日を書かぬ日を
歩一步いのちは重し花林檎

罪おもう日へ今生の秋桜
ふりかえる日の多くなり塩を断つ
生きるにもふたとおりあり艸になる
声かけて呉るるは風か一切空
意を決す芒の天の広さにも
わたくしを織る夏の音冬の音
こぼれ身や寓話を寒く寒く読む
そむこうとする身へ冬の陽のまとも
激しては冷めまた激し冬の孤を
風におのれともども狂えとや

生みの母疎みつづけて野に迷う
雪白く白くふる里捨てし身へ
地に眠るまでを男の飛花落花
やりきれない葦だ私の愚をみつむ
落し文拾つところと書いてある
現し身の寒さをまとう冬の鬱
なろうなら目にも冬をゆきくれる
冬灯の温さへちさき鶴を折る
見上げれば銀河あしたを信じたし
雪しんしん今宵は夢を終りまで

佳 作

岡 山 県

山 根 素 蛙

引金のあたりを黙読して眠る
消火器よ息災はせぬように
てのひらに冬の怒濤を書き遺す
逆境でひときは厚い鉤屑
手の窪でわたしの分校が眠る
わびさびの驕りに遠く綿が咲く
謎のない道で迷ってなるものか
ささめきが好きで先頭にはたたぬ
道化師が腰かけている火消壺
暗号の高さに吊っておくいのち

櫓田描き始めた独楽の死牛観
運命線に落石があるある日
木簡の消えた一字を温める
夏はいちずに問答をする人体図
すこし離して枕を置いた風の果て
捕聴器が他人の足音ばかり聞く
駄菓子屋に小銭で買える謎がある
脆い夫婦が朝晩暈る池の水
いくら待っても仏の舌が出てこない
礼服の内ポケットにある縮図

一匹は逃げ一匹は飯を食う
主婦の迷いをゆつくりと煮る落蓋
ドナーから昔噺を切り離す
終焉の荷物一個を締め括る
毒茸主演の森の賑やかさはどうだ
哄笑の痕を愚直に拭いている
当たらない的を葬るホテルの灯
駅裏の味で素直になっっている
遠い記憶を引き摺って来た雅楽
妻の留守白紙が一枚置いてある

佳 作

八 戸 市

笹 田 かなえ

耳朶囁まれるようなあなたの電話亭く
さつくりと雪を踏む音 逢いに出る
みつめられ身の奥深く火が点る
手の甲を押さえ込まれて奔るもの
なか指のはくる吸われてあやうかり
熱の身をひきよせられてなお熱し
うしろからだきしめられるもどかしさ
目の端にあなたの猛きのどぼとけ
叱られてうれいなんてすこし変
抱きあえばたったひとりのひとの熱

愛極むうすももいろに乳房あり
重ねあう身のしばらくの幻か
よりそえばさらにくらがりまくらがり
すこしずつ汗ひくからだ 闇うごく
歯をたてる 貴方の胸の仄暗し
涙するまぶたなぞられ 涙する
うつぶせの背中のおさをなぞられる
くらがりになつと生身の息の音
それぞれに聞く 明け方の雪降る音
逢ってきたばかりの息を深く吐く

思いつめると熱くふくらむ指の腹
逢いたいな ちらりちらりと雪もよい
鉄塔が遠くの丘にそそり立ち
もったりと逢えない夜の洗い髪
追憶のあなたにみつめられている
カーテンを閉める 男を捨てる眼で
ちぎれ雲 いまあきらめているところ
泣きやんであなたの知らぬわたくしに
橙の月がのぼるよ飢え激し
自戒して閉じるまぶたの裏の赤

佳 作

京 都 市

奥 山 晴 生

都会からWベッドを売りに来る
杭打ち機も僕も同日葵には負けぬ
まっすぐに泳ぐと溺死する街だ
メダルください僕は真面目に生きてます
大金を擲んだことのない両手
不器用な情けくれる玉子酒
ブラックホールへ地球は転げ出したのか
牡丹餅を待ってるやわらかい時間
街は不遜で贗作の絵が似合う
罪を入れる大きな金庫だと思つ

金色に塗ると庶民はお辞儀する
公平にメロンが切れる母の芸
坂を越えたら夫婦で鰻食べに行く
カルチャーで妻が大きく成るのなら
草笛を上手に吹けるのも悪た
失敗をするたび恋人をつくる
三文オペラ程度の情に身をほぐす
平凡な薔薇一本を守りぬく
鯉のぼり程の虚心になれまいか
そして雨期はるかになった指切りよ

あすという言葉へ深い深い霧
舵取りがアンデルセンを読み過ぎる
観覧車の上で他人の運を言う
やさしさごっここのトイレの水が止まらない
もりあおがえるは仏様のよだれ
姐の鯉を一気に裂く情け
引き金を引いてしまつてから虚ろ
吊皮の高さを越えぬ僕の塔
まぼろしが消えると一面の芒
二拍子のマーチで足りる定年後

佳作

和歌山市

辻スミ

百度まで熱して遺書を書かんとす
遠い森遺書は確かに埋めてある
森を出て敗者復活戦にゆく
重心を下げると海が見えてきた
川音高しいま真実に触れている
空想の熟す卵をてのひらに
勝算はないがゆっくり樹に登る
人文字のひとりとしての位置にいる
掌から砂こぼすわたしの黙示録
どこまでも嘘をつけない砂時計

あの時に泳ぎ残した川がある
てのひらのしずく零して生殺し
雨の絵を何枚かけば生きられる
逆転は雨の雫に溜めておく
消した火の行方を思ふ藁の馬
三叉路へ小さい影を置いてくる
人間失格影がひとりて歩き出す
壁が弱くて殺意を少しほめかす
寸劇が終りさびしい傘を干す
この世かな木偶ともなれず水を汲む

辛うじて賞罰なしの手を洗う
海鳴りがするページはめくらねばならぬ
うす切りのレモンと赦し合っている
何を見たくて一途にのぞく万華鏡
同心円の居心地よさに負けている
海は無限で長い手紙を書いている
月は天心一番おそい汽車に乗る
秋天へわたしの碧を絞り出す
祈りつづけてあとがきばかり書いている
この世の夢はこの世に捨てる曼珠沙華

佳作

東京都

島田小吉

世の中をうまく泳がず手打ち蕎麦
童顔のころのあだ名でまだ呼ばれ
ジーンズで木遣りの上手い三代目
鸚鵡にはならぬ雀の愛唱歌
マドンナの鼻が動く鼻濁音
童謡も艶っぽくなる薄化粧
妻の留守三太郎読む遅い昼
トップにはわからぬヒラの酒の味
料金はシニア映画はラブロマン
合つも縁離れるも縁露天風呂

皇族のトップレディーは帽子好き
一色に世論染まって国滅ぶ
赤い糸指から首へ絡み付き
じゃん拳で心理学者は負け続け
這えば立て立てば塾へと急ぎ立てる
品のない冗句が受ける世紀末
老いふたり身丈に合った穴に棲む
愛着の埃払って古書を売る
粗大ゴミリサイクル待つ日向ぼこ
一匹の糞虫宙に未然形

白い息吐いて丹頂舞い続け
日溜りへ飽食の鳩眠りこけ
愛鳥を論じて鶏の腿齧る
老眼に世のからくりが見え始め
道一つ探し言葉の森の中
ペンギンの腹の白さに偽善読む
串の数増えて男は饒舌家
流された六十年の無神論
ふと出合い連れ添っている摩訶不思議
夕焼けに外野の消えた草野球

佳作

土佐市

立原みさと

さくら咲く傷つきやすい春の耳
花びらに烙印重ね念者定離
しがらみを裁けば桜散り急ぐ
母を捨てし日より産卵始まりぬ
緋の色で女は対の壺を焼く
約束の言葉が埋まる春の壺
静脈にあなたの影が透けている
恋ゆえか左手首が発光す
虹をあむ少女の指に触れながら
六月の銀杏並木は予告する

同じ時間を生きんと赤い糸を吐く
真実の言葉に触れて紅葉す
ロダンより先に錆つく僕の顎
鉢植えの花によくある反抗期
向日葵の種に残っている嫉妬
落花する速度で人を斬りたしと
萩たわわ乳房をはしる不信任
暗号をひもとくように椿落つ
花びらをひとひら残す花の刑
野火走りくつきり残るわが余罪

母親を泣かせたあとの桜冷え
わが罪で母を下流へ押し流す
落花身にまとい母より深い業
妹の水平線に雪が降る
柩から風の時間がこぼれ落ち
蓮の花時間の限り抱擁す
生かされて花の最後を見届けん
野に点すいのちひとつが売れ残る
錠剤は天に拾いし群青の色
魂はいとゆるやかに解脱する

佳作

和歌山市

神平狂虎

左の胸の奥から白い波頭
煉瓦積む男の背中発光す
淋しさが膨らむ辛子色の闇
銃身を睡らせておく草の宿
受話器から船の汽笛がして熱い
掌の中の夢塚太れ白時刻
毒のある花を咲かせて睡らせて
美しくちらかしておく春の部屋
鉛筆の先で咲かせる冬の花
君の手の底のなかで光るもの

熱いいのちのあつい部分で機を織る
抱きしめて水の匂いを確かめる
体温のすべてを乗せて船よ翔べ
花を焼くその指先を血に染めて
それは秋の湖面のような瞳で炎える
熱い涙は光りの梯子だったのか
風が転がる男の弱さなど見せて
身の裡で焚く枯草の匂いかな
逢ったに冠水をするさむい首
景色の裏で薔薇の流した血を見たか

疵口の泡とこの世を流れよう
闇に眼が馴れても響かない鼓
行くあても無くて机上の白い船
冬と云う文字が滲んでいる胸だ
頬杖のつえの細さを想う雨
霜枯れの身から出てゆく星いくつ
内的な風雨を心地よしとして
詩人の部屋の周りいちにち汽車の音
蜻蛉巡回 宴は風の掌に還す
ふたりして行く落日の尾を切りに

佳 作

福岡県

長井 すみ子

シナリオの綴じ目が切れたのは 昨日
眼裏を徐々にひろがりゆく凍河
ここは何処手探りのくに 仏のくに
四人部屋 みんな地獄を見て来た目
眼帯の内なる風 外は春
返して下さい其れはわたくしのランプ
万華鏡 術後の蝶をあそばせる
ああむらさきもあかむらさきも悲につながる
田を描き終えたら森を出るつもり
泥舟も木舟も浄土にはゆける

鹿おとし いつまで影絵あそびかな
炎にはなれぬマッチよ 静脈よ
冬の虹 こぼを越えた舟を出す
水枕 母の鎖を解いてやる
告白も吞んで暮色の大河かな
転居先不明で戻る終日雨
飯の世のいのちあずける茅の花
じゃんけんはあいこで花は実をつけず
もう一度火を盗りに行く藁の馬
幸せの物指はなし 返し縫い

賞味期限が切れる葡萄も わたくしも
だいこんの花も明日を向いて咲く
引き潮のへやにブライドだけ残る
胃の底をあるく一日中微熱
あやとりの橋を渡って 悪女かな
のど仏乾く 平行線にいて
横たわるものの一つに父の斧
もう一人のわたしに鍵をかけてから
火を宥し 風を宥めて来た微笑
すすき野や いづから骨のない影に

佳 作

山形市

伊東 マコ

一匹を許せぬ こめかみのあたり
反省をしては腐ってゆくりんご
人形の家で勝負のないいくさ
世され世されと 女ひとりのクーデター
ちちははが染みついてるあはら骨
骨霊の中で聞ける波の音
大波小波 母の海からとび出せぬ
アリバイを片手に沈みゆく挽歌
沈みゆく陽ばかり好きふところ手
ストレスが溜まって石になりました

いつか石が シャベリ出すのを待とう
王様クレヨンで描くわたしの海
とび出す絵本から桃太郎家出する
かく生けり 隣間だらけの脳細胞
ぎくしゃくと余生を夫婦しています
鏡よ鏡 わたしの老後が見えませぬ
春をずっと待ちかねていた墓石
ドライフラワーまだ告白を待っている
逃げられた蝶へ不思議な安堵感
対岸のおいでおいでか魅惑的

きび畑もなかったかのように
やりくりがうまい軍手のみぎひだり
夕焼けが好きアドリブが好き真人間
へその位置自画像に描くしかと描く
生きている生かされているのどぼとけ
ごくらく、ごくらく、半眼で見る浮世
石を抱く 石の温さを信じつつ
一宿の恩 一飯の温み 日暮坂
梨のつぶて 花咲かせたか散らせたか
照る日曇る日御陀のてのひら広すぎる

佳 作

網走市

岩間 トキ

寒い劇場に人間があふれている
流転々どう生きようと果てようと
流木よ進路は北でよかったか
人間になれぬ手足が落ちていく
こぼれ萩拾うわたしの骨拾う
少年の松明北の空焦がす
正眼に構えて渡る川がある
難破船が来る水屋に水が無い
回転木馬老いの涙を見てしまふ
堅い血管に致死量のジョーク

蛇行する川一瞬のたたまい
過労死の影におびえる蟻の列
私書箱に届いたよれのわたしの
流木の過去は問わない花魁
片乳は北へ行く子に置いてくる
一枚の鱗が落ちた洗面器
豊かさの海で落とした権がある
透明になるまで滝に打たれよう
眼底出血つづく八月のマリア
断崖の風一枚に生かされて

地に還す母一片の花骨牌
ビードロの音色こぼれる満月に
賞罰はなしのつべらぼうが引く斜線
もう一人のわたし探しているわたし
雪崩音わたしの恋を生け捕りに
パッチワーク古い記憶を羅列する
残像を断つ指先で紫蘇をむむ
凍裂音白い胃の腑につきささる
シナリオは未完島影揺れつづけ
除夜の鐘一つ一つに雪が降る

佳 作

仙台市

宮本 めぐみ

夕焼けが美し過ぎてまだ死ぬぬ
ふいに雪新人類は辻占に
落日の輪舞の中にいるわたし
試し切りしてから咳が止まらない
こだわりの湯呑み一個と昏れて行く
手拍子の中でわたしの汐が退く
ときにわたしの膝で碎ける波がしら
さんぶりと波を被って開眼す
ボタン穴ひとつが胸に開いている
前列で毎日踏まれている尻尾

首輪外すと天もおんなも旅に出る
のれん一枚下げてわたしの防禦策
戯れに結んだ糸が解けない
糖衣錠もデンワも墓地まで従いて来る
三寒四温絆がすこし揺れている
頬撫でて行くのは風か旅人か
鬼瓦いちまいと聞く春の音
山のかたちに亡父はわたしの胸に棲む
逆らえぬ風が背ながら吹いて来る
ひとの名を思い出せない秋帽子

はらはらと散り行くものに人・落ち葉
何の前触れわたしの胸でする羽音
啄木もわたしも落葉樹の中に
たわむれに領いてからの寒い橋
胸に雪降るゆっくりコーヒー豆を挽く
楽隊が素通りして行く枯れ野かな
夕昏れの笛がわたしを招びに来る
修礼をしても散れずにいるさくら
散る時間はたと本は閉じられる
朽ちて行くものをしっかり見極める

佳 作

東 京 都

山 本 忠 次 郎

念仏をとねえ人でも猿でもない
高齡化あみだくじでもやりますか
知的な亀が通った後の静けさ
ボケ続ける悪ぶざけの好きな父
あつそつと天皇重いドアを閉め
漫画の吹き出しの中に父が居る
ミアーキャットの様に棒立ちの家族
引力を忘れてしまふ汚れたイブ
笑おうとして碎けた硝子の鬼
子離れせよ水鉄砲の届く距離

耳学問おしゃれな犬を飼っている
銃砲一発僕はピカソになりました
濡れたノートを乾かす桜桃忌
運のいい石が眠っている月夜
裸になっていると明るい墓場
信じてる男の影をたたんでいる
淋しそうなふりをしてる下衆の指
ほんに道化の天気図はいつも晴
時間の砂が顔にこぼれてくる朝
人肌のぬくみで点るいけない思慕

罪人よ肌着が乾くまで待とう
ゴミ捨場から出て来そうな有名な
特大の笑い袋にあるしこり
巣を出てからむしろ大胆な乳房
等身大のはりぼてにないふぐり
定まらぬわが良心の落とし所
地下室のむくみがとれぬあみだ仏
印画紙の中は寒いが信じきる
肝っ玉をつついて回る悪魔の杖
突然増える皇室の笑い皺

佳 作

大 津 市

峯 裕 見 子

海からの返事をずっと待っている
生き方が下手ね窓だけ光らせて
生牡蠣のつるりと嘘を飲み込めり
ワンツースリーで夫を消してしまおうか
じいちゃんに女ともだち二人いる
豚の尾の渦も明日へ向いている
妻の友達を三人言えますか
いのこずち付け追いかけてゆくものは
波の音だけが聞こえる本籍地
ネクタイをゆるめ野良猫呼んでいる

兄さんの恋人の靴ちよつと踏む
灯がつけば手紙のほしい部屋ばかり
私の形にへこむ敷きぶとん
母の乗る電車を追ったことがある
砂の音背のファスナーに手を貸せば
かげろうの中兄さんのバスが来る
庭が見ているので膝を崩せない
電飾の一字は欠けたままである
病人と花の話をして帰る
人間を見限っているガラスの眼

海を見に行こう言いたいこと少し
身の丈に合った茶碗で水を飲む
出口なし拳の中の塩砥める
吊り橋で迷う男を放って来た
犬を呼ぶ声がしている日曜日
空へ続く柱を登る素手素足
洗いっぱなしの顔で嘘などつけないな
末の子の咳のくすりは夕陽色
橋渡るきのうの泥をつけたまま
ばたばたと雪逢いたい人がいる

佳 作

長 野 県

山 宮 風 子

風の彩そのおぼろげを追いつづけ
仏像のみ肌女性の香に畏る
人を恋う酒恋う雪が白すぎて
よれよれの造花が故郷の雪に佇つ
父埋めて雪の白さを掌に掬う
写経しても迷路の花火雪の中
海の青人の哀しさ溶けて青
愛されず愛さず海の青に佇つ
なにもかも焚いて佇ちたい海の青
この柵を超えろと仮面そそのかす

独り旅風の道標尋ねえず
童神の湖に真つ赤な母を描く
ゆっくりと辿ろう花種時きながら
ばらを折るあの夜の調べ青すぎて
石段を登りつめれば虚像錆び
旅に出る命の水が甘すぎて
墓場離婚骨ざわさわと活きかえる
温すぎて呪文が断てぬ糸を曳く
微笑みが切りついて行く造花
音たてぬ男が密かに塔を組む

孤高とは哀しい宿命甘茶浴び
小人閑居小船の舵が定まらぬ
土台石置かれた位置を疑わず
罪一つ曇る鏡を拭きつづけ
産声が星の一つを呼んでいる
初恋は重画の舞台花おぼろ
操られ操り夫婦戯画の中
夫婦傘差してる安堵と退屈と
狙われた背中演技して見せる
筒先の獲物が笑いかけてくる

佳 作

北 海 道

野 村 禎 子

どの種を蒔こうか淋しいのひらに
泣いてひび笑ってひびがまた入る
これからは一人塩胡椒はたっぷり
ぎくしゃくと年齢をとっていくんだね
ジャムはたっぷりなぐさめはいらない
坂の途中で粋なコントを演じよう
妻というレッテルどうぞお大事に
フライパンの広さぐらいは守れそう
口笛で崩れてしまふ私の積み木
キャラメルはおぼろ泣くだけ泣いて

桃のかたち命のかたち 人恋い続く
しばらくはケーキの上の苺でいたい
呼び鈴が錆びて私の夏が逝く
そうめんつるつる他愛のない女
はーはたる秘密一つが守れない
置き忘れた傘がもどって邪魔になる
どしゃぶりに時々出合う仏に逢う
しりとりが終る静かに風も止む
どの道も同じ野原に出てしまふ
麦熟すやがて訣れる刻がくる

弱点をつかれて燃える豆の殻
雪虫が死ぬのに笛はいりません
言い残す事はないかと雪に問う
雪虫乱舞はがゆいばかり愛闇に
座席が一つ空いてますふゆ
ひとりでは何も出来ない雪つぶて
私の自由を奪う雪の結晶一枚
つらい雪口に広がるカルピスよ
雪しんしん鬼の話が長過ぎる
笑わない皿一枚積んで冬

佳作

大阪市

島村美津子

花びらは死者の冷たきみん死ね
 ほんとうは飛んだつもり落椿
 五つ数えて哀はこぶしに閉じこめる
 彼岸花わたしに何ができたろう
 桜を降らす正午のチャイム鳴っている
 雲の流れを気にすることも無い無職
 梅の瓶みんな元気でいるように
 骨拾いままごと遊びかもしれぬ
 羽根いっぱいひろげてくれた親の屋根
 杉木立下ミノ倒しがいつかある

佳作

札幌市

佐藤幸子

開花宣言身の振り方は決めてある
 ゴシップの好きな野鳥と遺伝子と
 柵をきれいに洗い風邪をひく
 きのも今日も二つ違いでいる夫婦
 旅はまだ続く失禁くり返えし
 暗がり拾い集めるわたしの鳴咽
 微震軽震 雑木林が寝つかれず
 ボケットの奥の夥しき自愛
 自己欺瞞ゆっくり梨の皮を剥く
 一杯のコーヒーで足る軌道修正

水仙は嬰兒の匂い子を生みます
 よいことは朝顔咲いたことくらい
 神さまと目が合わぬよう低姿勢
 末の子さびし父母送る兄送る
 どこへ落ちよう一本の綱光る
 バタフライ私の唇がとがりだす
 わたしの影がとろりと動くどこへゆく
 イブの血を確かに継いでわが助
 ロックのリズムに乗ってほんとのこと叫ぶ
 病癒えわたしの机撫でてみる

再生紙おんなが戦好きになる
 さぐり合いまた始まりぬ冬木立
 グリ展のダリの鯨舌夫の無口
 柔かい時計おやすみなさいあなた
 しなやかに踊らむ鬼火消ゆるまで
 垂直に降る雪信じていいですか
 雪虫の疲れたうしろ姿だな
 優柔不断たつぷりとメモはとる
 沈黙が怖くて逃げる毛糸だま
 身軽にはなれぬ着水注意報

佳作

札幌市

松田悦子

夜汽車発たせて私のための夜道を歩く
 折紙の折り目きれいに老いてゆく
 枯れるもの枯れる初冬の氏素姓
 葉牡丹の一鉢自由に縛られる
 糸こんにゃくが煮つまってくる冬景色
 桃の実の情けがやけにやわらかい
 しはし生身の朝露ならんまろやかに
 たとえはの死水なりし花の雨
 蛇口ゆるめて生死の漏れる一期かな
 三寒四温 変り易きは人の心

寸分の狂いなきも悲しき芋の花
 いつまでの砂山を掘る仰臥せしまま
 現実の溢れる夜景の中にいる
 買い手のつかぬ影と一日夕焼ける
 思い煩うこの身一つのかたちなど
 寄り添って淋しい日もある枇杷の種
 がんじがらめの縄がほどけぬ白菊黄菊
 白樺の白い想いを等身大に
 秋水一点わが投影のにごり出す
 私の死後も同じかたちに北斗七星

踊いたかかとをよぎる死人たち
 殺意ふとほんのくぼから冬の水
 錯覚か 経一巻の雪明り
 雪仏 表も裏もなく 心
 雪温し土なおぬくし素足を晒す
 霧が晴れたら私を探す旅に出る
 身分証明ちちよはよと身を寄せる
 花をまこうて芒まとうていまだ放浪
 輪廻転生 雲ゆくごとし水ゆくごとし
 ナナカマドの朱より雫する栴り

佳作

弘前市

矢本大雪

眼をとじて架空の舟と雪のなか
 雪つもる鶏冠や告白したきこと
 深更の鳴らない眉をかきむしる
 いちめに雪ふるペンで描くこの世
 卵を置くほの暗き夜のまんなかに
 夕焼けの朱よりせつない口笛する
 脳裏から剥がれぬ炎 滝を見にゆく
 ひとりずつ夕陽に濡れてバスの中
 枯芒 抱きとればみな泣きだしぬ
 氾濫がはじまる 生命線の蒼

たましいの凍夜の底に雪の舟
 熱い手で雪のマリアを抱きしめん
 腕をほどけば青い氷柱となつてしたたる
 灯しあう一語一語にぼたん雪
 腕のなかで雪は激しい赤になる
 逢いびきの真夜 盲目の魚となり
 みつめあう魚や水底までの雪
 月明や したたる権を横抱きに
 玄冬の水を雪野へ汲みにゆく
 空舟 一樹と黄泉へ発たんとす

てのひらは夕陽のように裏切りぬ
 ふわふわと死斑 爪先までの海
 噫々と哭けば肺まで届く小米雪
 本屋から出てゆきどころなき小雨
 哀しみきまれば雪は寂光
 いちぎょうの駱駝のようになうねりゆく
 廃船に降りつむ雪や 死ねなかった
 思い断ちがたき蹊までの川
 閉じ籠もるために小さな円を描く
 どんよりと冬の鉄塔 自虐きわる

選を終えて

桑野晶子

白い祭りが終わると、人々の心から大雪像のことも人波のことも足早に通り過ぎていく。遠い日の、転がして転がして凍れながら、思っている目の鼻に執したあの雪だるまは、今も根強く胸に在る。

特選 渡辺和尾 氏の一句一句は、風花の一片一片のように煌いた。風花が舞うのは青天がひとつの条件、風花はうた詠みの心のように、折々を自在に結晶して野に街に潤む。物言つて巧まず、きらりと読者の懐に宿る親しみは、句の周辺が晴れているからであらう。曇天を歩いてこんな笑顔かな

ひとらつどい人形の目を見て過こし

秀逸 石部明 「作家がエネルギーを充実して書ける期間は、どんな作家でも十年」といわれたのは吉竹淳之介氏。その円熟の直中にいられる明作品。男を描く切り口は、ある年齢がめぐるないと出て来ない情感が漂つ。ほの青く光る言葉の質感も印象深い。

虫ピンで蝶刺す遊び夏はきぬ
人体のひえびえと咲き轟く喉
秀逸 荻原久美子 ことばとの信頼関係がとても密になったと思う。ことばは正直で影を連れて作品にこたえてくれる。

同床の夢つたひして雨瀟瀟
山桜あまりに惜しみなく散りぬ

秀逸 佐藤岳俊 風土作家として高い定評を得て久しい。語気の荒さも土に生きる者の叫ばずにはいられない体臭として感動させる。五百羅漢の念のように句を彫る姿は尊い。

失った鏝をさがす胃の闇で
井戸水を神棚にあげ年を越す

中川一氏 三十章の神楽舞は一卷の絵巻。冒頭から強いインパクトで説話風の炎を孕む板東弘子さんは、夕暮れの滯けさで、吉田浪さんは春風の明るさで夫々の抒情世界を豊かに紡がれている。梅崎流青氏は、句のサワリの部分を心得ていられる。情野千里さんの不

思議な妖しさ、軽快な言葉運びは興味深い。伊藤紀子さんは心底を流れる人生観が基底のよつだ。さりげなく魂の器を充たす力がある。

〇 〇 〇

枇杷青し危うきことを口にする 高橋かつき
花から花を母から母を慣う時雨 岩崎眞里子
遠さかるもののひとつに笹の舟 松本 百子
向日葵の極が動く 少年の汗 柴崎 昭雄
鳥は天にひとつの秋と立ち話 高田 政旗
灰白くいもうと光る中洲かな 倉本 朝世
春泥の人参これはわが素顔 桐越 千絵
空缶を捨てる華麗なセレモニー 海堀 酔月
冬の野にあらんばかり鳥ことば 大谷晋一郎
厚い言葉に出遇う仏具屋の時間 斎藤はる香
月光のかすかに触れる指定席 樋口 仁
折紙の折り目きれいに老いてゆく 松田悦子
雲ながれ女ひとりの水の腕 加藤かずこ
落葉松の道は落葉松の音で日月 吉田三千子
美しい布を裁ち違えてしまつ 広瀬ちえみ
寒い劇場に人間があふれている 岩間 トキ
薄き命水色ランプ掌で囲う 網野 悦香
懐いだそうと水音はかり高くして 後藤止子
フライパンの広さぐらいいは守れそう 野村慎子
輪の中で涸いた笑い尉になる 進藤 一車

選後感

酒谷愛郷

初めての栄あるZ賞の選でもあって、選者の依頼を受けてから、どんな素晴らしい作品が手元に届くだろうかという期待と、初めて選らしい選をする経験の為の不安とが、交錯した何日間かがつづいた。

そしてまた幸いにも、そう難解さを秘めた作品も余り無かったので助かった。すこしでも多く作家の「内心」を通した作品に感得できればと作品に對置した。

しかし残念ながら、私自身の選に対する未熟さゆえかも知れないが、これといって傑出した作品が無く、上位四、五名のランクづけにきて、かなりの苦慮を必要としました。

特選に推した板東弘子さんは

水の邑 行きつく先にあるランプ

水仏傾く 水の快楽な

凍天をかすかに啼くか掌の空洞

ひとりの家の暗がりなれば病み上手

供花の白菊 運命論の是是非非に

これらに見られる作品構成に、無理に奇をてらうこともなく素直に映像化されている、視点的確かさに眼目できた。

只おしむのは、二、三句ばかりすでに詠みつくされた作品等の混在や落差が気になる。

秀逸の荻原久美子さんの作品には、情感を抑えながらも、妙に作品の全体を通しての「彩」を感じさせる不思議な雰囲気さえ秘めているようにも感じられる。

中川一さんの作品の一つ一つに骨格もあって隙は無い。只作品に遊びのないぶんだけ、面白さには欠けているかも知れない。

それと氏の潜在する力量を思うとき、今回の作品はもの足りない。

吉田三千子さんの作品には

けだし世の夢は酔うほどに痛いよ

こんなに寒く木まで歩いて人になるらし

秋の水 夢の規律はみごとに苦し

こうした句に他の作家に見られぬ吉田さん独

自の詩の世界（空間）と共に、作品構成に新鮮さもあって特筆する作家だと思ひ、今後を期待する。

佳作以下では、柴崎昭雄さんのその清新な感性の作品に注目できた。

他にも何名かの注目した作家はあったが、これらの作者の力量を思った時に、やはり今回の作品は不満が残ったのは残念でならないと思う。

花から花を母から母を慣う時間

岩崎眞里子

遠花火母がまといし風の帯 柴崎 昭雄

手招きをするのでもなく百合の怪 石部明

悪人の顔よ電車は右カーブ 渡辺 和尾

秋はひたすら祈き墳輪と野にほろぶ

吉田 浪

一晩の重さ湿地を父から子 梅崎 流青

父の荒野に指が一本ずつ殖える 海地大破

水乞えり集落の芒へ一夜をとう 大谷晋一郎

とんぼ死す目玉に百の空残し 野沢 省悟

風の彩そのおぼろげを追いつづけ

山宮 風子

雪に言いて母は髪より煙るかな 柿木英一

選 後 に

岩 村 憲 治

何故孤独が

石の様に 機械の様に

強くあつてはならぬのか

今年の始めに亡くなった安部公房の若い日の詩の一節が新聞で紹介されていた。

ぼくらは強くない部分で、孤に徹しきれないところで、川柳へ関わろうとしているのではないだろうか。単に「孤」という意味だけでなく生も死も含めた揺れ動く存在の声を発しながら。そしてその声を叫びを取捨し順位をつけるという行為に、ためらいとまどい、不遜ではないかと自分の動悸の高鳴りにしたたか搏たれてしまった。

石部 明はうまい作家だ。書きあげた言葉とことばの空間に、読者を、自身を、開放しようとする。何を、どう表現するか、は全く個々のものではあるけれど、石部明が何を書くかの選択をこれからも楽しみにしたい。

う、揺るぎのない視点から存在の哀歓を、言葉は直截だが、想いを定着するのに性急でない、ゆとりのある語り口を見せてくれた。

吉田 浪の昨年秀逸で掲載された十八句をうまい作家だと思って読んだ。その印象は変わりなく感受の鋭さを柔かくつつみこみ弛緩のない姿で読ませてくれる。

樋口由紀子は煌めく感性が走らすペンと、内なる屈折を一句へと収斂し読者へ迫まる作品も書きあげている。

体内にガラスあること膝立て眠る 梅崎流青
蒼天を風の柵とおもふべし 荻原久美子
白鳥の声いちめん冬がくる 佐藤 岳俊
反芻や からたちの棘バラの棘 吉田三千子
遠景のサクラもがいても雪の村 伊藤 紀子
縫い針をかざせば空に通路あり 倉本 朝世
一組三十句破綻なく読ませてくれる作家もあれば、呼吸の乱れは見えても輝く一句を示

す作家もある。選者が一組か一句かと俊巡するところだが、それはともかく、梅崎流青の「ガラス」はよくにも深く傷い。

情野千里の言葉は奔ってくる。駆けて来た言葉と意志はくるりと反転し、情野千里だと主張する。主帳させる感性が躍っている。

○ ○

除夜の鐘一つひとつに雪が降る 岩間 トキ
道化で老いて月の林に耳澄ます 中川 一
掌の茶碗ときどき海へ行くらしい 野沢省悟
命たまゆら午睡の夢に舞う螢 網野 悦香
真夜中の部屋の隙間と柵のすきま 柴崎昭雄
潔い 行方不明を思いおり 山本 礫
沛然と雨 懺悔とは関わりなし 松本 百子
天高し蟻は不死身に近きもの 坂東乃理子
八月のグランドピアノ雲が湧く 海地 大破
新しい仕事着を着る挿し木する 史森 祥智
いわし雲海で死ぬ子はもう産まぬ 千葉風樹
春愁の空を見上げて空を見ず 高橋かづき
食べながら話す死ぬとか生きるとか徳永政二
楽隊が素通りして行く枯れ野かな宮本めぐみ
落ちリンゴひろいあつめて老いた父 前田厚兵
敬老という曇りガラスを拭いている 万迷多
十二月野菜畑を買ってくる 高田 政旗

ある 選 後 感

片 柳 哲 郎

「価値感」のある作品は次第に消えてゆき、新鮮さはあっても「輝き」を失った、単純に旨い句が眼につき始めた。価値感のある作家つまり存在感のある作家が次第に消えていったと言ふことであらう。Z賞作家とは僕にと

って旨い作家の賞揚ではなく、価値感のある川柳作家の文学性の称揚である。それを見逸ってはこの作家賞は単なる川柳大会優勝者表彰と何ら変わるところがない。期待すべきは若い作家たちが持つ豊饒な句作活動と、天が彼らに与えた句作の使命にどう対処して来たかであった。

推薦一席の石部 明氏は、その豊饒な詩精神に於いても他を引き離していた。作品の中で読者に遊化を与える不思議な作家の印象を深くしたのである。何よりも姿勢（かたち）の違いがこの作家の眼差しに優しさを溢れさせていたと僕は収容した。

倉本朝世氏の眼はいつも「新鮮な光り」に満

ちている、と言いたい。これは若さが持つ大切な精神のなす業である。恰好のよい見事に達者な作家たちには見失われた午後なのである。新しい存在の画材をもつこの作家は何かを現代川柳の中に求めているかに見える。

中川 一氏の作品には精神裂帛の気迫があつて、氏の作品の昇華として受け止めた。自分自身の心の本質を白と黒の色彩の中に結んでいるかに僕には思え、その年齢を直視する厳しさも真実の提訴として受け止めた。

なかはらしいこ氏は上手さの点では読者を魅了させる才を持った作家だと思つ。さり気ない言葉の配合が群を抜いて一句の独立性を全うしており、余白を蓄えていた。緊迫感はないが何かしら読者は感性の余裕を持つ。

板東弘子氏の川柳はいかなる場合も亡父・亡母の追慕にある。その表白法が川柳家になった思考目的であるかに見える。そしてそれを作家の「思いに殉ずる」成果に結び

つけた作品群であった。

樋口由紀子氏は既存川柳から、誇張工作しない新しい詩的感覚の自由を確保していた。しかも品格の具備を忘れていない様である。その他、広瀬ちえみ、柴崎昭雄、荻原久美子、吉田 浪氏らの作品に面白さを抱いた。

30句制作工房の成果としては、やや難があつて推薦し得なかつたが、一句賞揚と言ふ意味で印象に残った佳品を挙げて置く。

＊

風と歩いて風より青く染められて 本多洋子
しりとりが終わる静かに風も止む 野村慎子
無造作に色があふれてくる日暮れ 後藤止子
火の姉と黒髪のなか溶けてゆく 平 宗星
薄き命水色ランブ掌で囲う 網野悦香
雪あかりだけの貌して側に妻 前田厚兵
狐火や赤い命のつきるまで 岡見阿衣
雪の花ひとさし指に降りつもる 田代時子
ひまわりがいっぱい兵十還らない 福井陽雪
日傘くるり回すとひと夏が終わる 本間光子
寸劇は終わらさびしい傘を干す 辻 スミ
妹の水平線に雪が降る 立原みさと
桜を降らす正午のチャイム鳴っている 島村美津子

私の存在する句

橘 高 薫 風

応募者の一人である私の知己に電話をする。「君の応募句、上五を言うから句全体を言っ
てほしい。再確認したい」。「ちょっと待っ
て下さい。ノートを持って来ます」。「いや、
しっかり覚えてる句だけ答えて下さればよ
い」。「意地悪ですね。どれも正確には覚え
ていませんよ」。「あなたの句は伝承性から
言うと手こずる句ばかりで暗記し難いなあ。
「二瞬時の直感で生まれたのですから、イメ
ージの飛躍も激しいわけです」。「覚えやす
い句がよいというのではないが、意欲作なら
忘れ難い筈だが。直感が支離滅裂になるの
ではかない」。このような作品が多かった。

特選

福井 陽雪

空を飛ぶ鯨は僕の愛である
寂しくて人の形で眠れない
被爆絵のように紫陽花枯れるのか
この作者の句には重量感がある。それ故

海堀 酔月
すれ違った電車にぼくが乗っている
白旗に似てるがこれは冷や奴
この二句で秀逸に選ぶ。それ程、私のこ
ろに一致する感慨があった。

佳作

松永 千秋

胸中に鳥の渡りの絶え間なし
風景が動いて行っただけの旅
この作者の句は自身の生活、生活の周辺か
らの取材で、それを感性で濾過している。

樋口 由紀子

はつなつへ全身の水入れ替える
淫々と身体の内にも白き斧

遠雷やなにか抱れていきそうだ

この作者は「私」が鮮明に描かれ、私の鋭
い感性を通した肉親が描かれている。

梅崎 流青

残照に父立ち鶴の擬態せり

平和像の指をしたたり落ちる夏

梅干しが一つずつ減る命ありて

男性らしい切口の鋭さと表現的確さに深
い共鳴を覚える。

以下の佳作入選の評、省略と容赦下さい。

三十球の触感

高 田 寄生木

川柳Z賞の事務局を十年担当して今回選ぶ
例にまわった。

一人三十球ずつ全力で投じてくるものを受
けとめる捕手役の選考委員の労苦をしみじみ
と感じている。

三十球を揃えることの至難さをおもひ、そ
して、どの三十球にも一球の輝きがあること
もひとつの発見でした。

特選 佐藤 岳俊

冬木立の背骨のままつく

鱈汁をすすり吹雪の夜渡る

雪乱舞助の鬼が踊りだす

天のいちばん深いところに僕がいる

眼の開いた鱈いびきをぶらさげる

百姓の手は節くれだっている。爪の間には
土が棲みついている。大地の喜びも哀しみも
知っている。一句としての完成度には少しの
難はあるが、三十句の魅力に圧倒される。

秀逸 梅崎 流青

かりかりと蟹の足食う喪の季節

死者に盛る飯がふくら炊きあがる

蝶になる途中で息をしまつ

読み返しながら不思議な魅力にこころを揺

さぶられる。生活感のあふれるモノクロのド

キュメントにひとりの人間が発光している。

秀逸 渡辺 和尾

凍てついたたましいたちを置く街区

遠方に友だちがいる節分会

捜しもの日日にあり雨の窓

飄々と一球一球を投じているが、きっちり

コーナーを衝いているベテラン投手の風格。

秀逸 本多 洋子

死はふいに坂の柵欄が暮れ残る

風景をしまい忘れた食器棚

月を恋してしまった小さなひまわり

人生の岐路を少し過ぎた女性のときに揺ら
めく心象が強く伝わってくる。

ここに残る作品たち

わたくしがしずかに腐る冷蔵庫 倉富洋子

モナリザの背後をどこまでも歩く 育子

いつかきつと丸文字でくる果し状 礫

顕微鏡つまらぬものを見てしまふ 佐知子

蒼き血がふつふつ人は人を撃つ 恒坊

さくらさくら薄き命を揺り起す 悦香

吊り下げられた鮫鱈に知る氏素姓 余子

夕暮れのコップの中の劇でした 阿衣

証人のマツチが濡れてからの闇 信子

ソプラノの女が夜景から消える 規正

折れ易い箸で魚の骨突つく 千絵

わが猫背風のささやき訊きもらす 時子

眉間から雨やすやすと降りつつく 風子

鳥は天にひとつの秋と立ち話 政旗

花束は大きくなると眠りだす 福

B面にだれも知らない樹が育つ 悦子

ぼろぼろの助と耳も水びたし かずこ

生きてゆく風景さくらが眼にのこる 柳舟

古刹ぼうぼう返事のいらぬ手紙かく はる香

春らんまんヒト科の窓が溢れたす 英子

屋上に未完のカヌー横たわる 俊太郎

耳朶深く一尾の魚を眠らしむ 迷多

家中の時計が動く逃げられぬ 百子

「侏儒の目から」

寺尾俊平

作畧群に若い作家が多いということが、この Z 賞のよい特徴であると思う。沈丁花が匂い梅が散って桜の蕾が開く一ヶ月の間、その作家たちを混えた作品にアプローチした。その結果が次の通りである。

石部 明

明作品をみると、西協順三郎の「プロファヌス」の冒頭のことばを思い出させる。彼の眼は、まっすぐに対称物にむかって、ゆるぎのない構図をつくりあげる。よい作家になったものである。

虫ピンで蝶刺す遊び夏は来ぬ

いろいろの耳あつまって読経せり

梅崎 流青

汗いっぱいの男の匂いが作品の間に漂っている。何かムキになっている作者の表情に魅入られた。

体内にガラスあるごと膝立て眠る

荻原久美子

爽やかな作品の中から、こころの起伏が感じられる作家である。旧かなを使った表現から柔かい弾むようなものを感じつけた。

蒼天を風の柵とおもふべし

吉田 浪

彼女のおもいが、その弱々たる表現の中で静かにこちらに伝わってくる。微かに響くオルゴールのメロディのごとき作品である。

ゆるゆると花破りくる風ありて

倉本 朝代

なにか小さな組曲を聞いているような展開がたのしい。

渡辺 和尾

悠然と語る彼の作品にこちらが試されているのかもわからない。

野沢 省悟

ひとつの信条を探求している作家である。ひたむきなまでの試行錯誤に拍手する。

樋口由紀子

さやさと自分のおもいを伝えている。家族の風景が淡い水彩画で描かれていて、ゆるやかに感動がわいてくる。

佐藤 岳俊

北のこころを清らかに持つ作家である。やっぱり彼には雪の背景が似合うのであろう。

夏はいちずに問答をする人体図

山根 素蛙

満点へ愚かな石を積むばかり

佐藤 美文

目殻をザクザクと踏む朝の葬

情野 千里

水草が一途に茂る女人講

伊藤 紀子

裸になっていると明るい墓場

山本忠次郎

魚屋にきちんと並ぶ魚の目

徳水 政二

血管の中を無数の蛇泳ぐ

平 宗星

※

いつだって給水塔は孤独なり

高橋かづき

月の夜のたまご哀しくて白い

後藤 正子

眼球をとりまく笑い皺と未来

樋口 仁

残高を数える屈葬の父よ

河瀬 芳子

遠近法のずれた戦争画が売れる

進藤 一車

一本の虹を家族の数で切る

広瀬ちえみ

しがらみの石の手枕・石枕

松本 百子

不発弾抛ると冬の海のしづき

万 迷多

私の横で眠っている仏

海地 大破

爆弾を抱かせ愛撫をくり返す

保田 二郎

作家を求めて

岡田 俊 介

応募していただいた作品には、一句一句にいのちを感じた。作者と読者を結ぶのは感動だと思っている。感動に立脚した、感動を備えた作品が、私を含めて読者に伝わってくるものと思う。

三十句とも粒の揃った作家として、中川一、佐藤岳俊、荻原久美子さんを挙げる事ができる。その作品には統一性があって、作家としての個性が厳然と存在している。従って海地大破さんの研ぎ澄まされた数句と共に、特選、秀逸とした。以下に短評を試みる。

○

中川一さんの作品は、天主堂の青いステンドグラスを通してみる世界のように、清楚でしかも屈折の多い独自の世界を創出する。適確な比喩が作品に味わいを与え、奥行を与え、生と死、炎える瞳のイメージが鮮明で、作家性があり、表現方法にしても、時に鯉舌になることはあっても、安定感がある。

ているようだ。

荻原久美子さんは、比喩を駆使する華麗な表現で、絵画的な美しい作品を書いている。言葉が鋭敏な感覚でもって御せられ、読んで楽しい。句語の適確さは随一で、表現レベルは高い。しかし、作品に今一つエネルギーを感じられないのは何故だろう。作品の中に、

顔を出したり出さなかったりする作者の、作品中での位置の問題とも思われる。その中で「玻璃覗く」の作品は、イメージが洗練されている佳品である。

○

興石幸司さんの作品は、一句の華やかさはなくとも、作品のレベルが安定しており、身についた誠実さと一人の人間の生きざまを感じさせる。

石部明さんのどこかに甘さの残る作品は、それでいて、不思議な味わいを与える。

梅崎流青さんの作品は、個性が見えにくく、読むたびに印象が変わった。最初の数句が悪い方の印象を与えるようだ。

吉田浪さんのオノマトペは、或る情感を醸し出している反面、作品を弱くしているのは否めない。

情野千里さんのクールな視点がいつもつきまとう作品は、読者をくすぐる力をもっている。

○

この他、次の作品が味わい深かった。
濡れたノートを乾かす桜桃忌 山本忠次郎
かぎりなく雪に近づく侍よ 朝倉 福

十六人の個性

八坂俊生

応募総数百十九名のうちから事務局の指示どおり、特選一名、秀逸三名、佳作十二名、計十六名を選んだ。

川柳作品によく見かける言葉を使っている句が多い作品には、佳いものが少なかった。

折角の自己の思いがその言葉によって独自性を失うからだろう。思いの周辺に在る言葉で表現したいものだ。手垢の付いた言葉で表現すると、思いも手垢まみれになってしまふ。

常識の範囲で作られている句も多かった。

自分を見つめてその本音のところを表現すれば、常識を脱けられるのではないか。誰でも本音を晒すのは躊躇するものだが、躊躇したばかりに新しい発見をフイにってしまったと思われる句もあった。

川柳は情に流されてはいけないと思う。人間批評の詩なのだから。情に流されていたのでは批評にならない。特に自己の内面を詠む川柳は情に流されてはならない。

応募作品全体を通して以上のような感想を持った。

特選に推した高橋かつき作品は、感受性の豊かさを感じさせ、そこから生まれた言葉が一人の女のナイーブな内面を形象化している。秀逸の情野千里作品からは、積極的、行動的な女が見えてくる。一句の事柄と事柄の取り合せが面白く、読者のイメージを膨らませる。倉富洋子作品には現代の女性が居る。言葉遣いにも若い血が通っている。坂東乃理子作品はへたくしを大切に生きている女の姿がある。

佳作のトップに据えた本多洋子作品は、亡夫への鎮魂歌。共有した歳月の重さをしみじみと感じさせて、特選、秀逸に優るとも劣らぬ作品。笹田かなえ作品は愛欲の世界をリアリズムの手法で詠んでいるが、闇の部分を意識している眼があって、通俗性を免れている。西秋忠兵衛作品と島田小吉作品は伝統川柳の

系列に属する作品。二作とも伝統川柳の良さが出ている。作者が自分を見失わずに生きているからだろう。

あと、佐藤岳俊、樋口由紀子、矢島玖美子、広瀬ちえみ、北川弘子、石部明、梅崎流貴、板東弘子、諸氏の作品を佳作に推した。

準佳作は、順不同で、松村育子、山本磯高橋佐知子、田沢恒坂、山本余子、なかはられいこ、野沢省悟、海地大破、朝倉福、鷺谷美津子、徳永政二、千葉風樹、諸氏の作品である。

最後に準佳作から十句を抜いておく。

傷口にあるまっさらの細胞よ 佐知子
はつこいの空を横切る飛行船 恒坊
省情のこぶし開けば藻の匂い れいこ
とんぼ死す 目玉に百の空残し 省悟
切株にゆっくり座る調律師 大破
離さねば腐ってしまう二人の手 福
母となる友爪も手もさくら色 美津子
水族館少し悲しくなつて出る 政二
シナリオはないが 道化になつておく 磔
世界一きれいな妻の指きつね 風樹
選を終えて、この文章を書きながら「川柳はこれだから面白い」と思ったことである。

詩語の老化と個性の臍化

—中川一さんを薦す—

尾藤三柳

いつもながらシンドい作業だった。人間の神経にたいするコトバの残酷さを、例によってたっぷり思い知らされた。これは、コトバそのものが、ひとつの発光体であることを証明しているようだ。詩語それぞれが持つ輝きを、宝石のオパールから取って「オーパリジールント(opalising)」と名づけたのはインガルドンだっと思つたが、彼は、同じ詩語が繰り返し使われることで光を失っていくことにまでは触れていない。つまり、詩語は初めて発光されるときに限って輝きを持つことを、自明としていたからだろう。

中村富二が、三十年も前に「太陽は一つ卵は二つある」といったとき、詩語化された「卵」は鮮やかで、まばゆい輝きに溢れていた。それより先、西東三鬼が「広島や卵食ふ時口ひらく」といった「卵」の光芒とはまったく異質の発光体だった。

なぜ、こんなことを持ち出したかというところ

今回の参加作品の中にも、相変わらず「卵」がゴロゴロと登場してきたが、すでにそこから新しい輝きは求められなかったということを書いたからである。尋常な手続きでは、「卵」はもはや詩語たりえないということである。

もちろん「卵」は一例に過ぎない。時の中でステレオタイプ化した「死隠喻」に、詩的な付加価値を求めるのはむなししい営為であり川柳を動脈硬化させる最大の因となっていることを、川柳作家ひとりひとりが考えなければならぬ時期に来ていると思う。

今回の一〇八点に及ぶ参加作品を見ても、水準は決して低くない。というより、回を重ねるにしたがって、総体的な密度が濃くなり十分な手ごたえを感じさせる充実を見せているといつてよい。が、その反面で発想・手法が均質化し、作句間の個性がしだいに臍化していることも否定できない。

「卵」から新しい世界を切り開くことが現在では困難なように、新しい自分の世界と対決するには「自分のコトバ」しかない。それが俗耳に泥まないゆえの難解さは当然のことであり、それは作者の罪ではない。

わたしが、中川一氏を推したのは、まさにその理由からだ。

何よりも作者自身のコトバと、それに適合した独特のフォルムを、完成に近いまでに個性化、単にユニークという以上の浸透価値を留保しており、個々の用語こそやや佶屈ではあっても、一章の流れに快い緊張感がある。

夜神楽の細女と果てむ火と果てむ

防人の眼を持ち伊伎の海士とし果つ

辺境の両眼笑えて潮ゆく彼方

うめく埴輪 戦無派は風と過ぎ

あえて指摘するなら、語法が比較的画一的で、三〇章を並べると、たとえば「潮ゆく彼方」「発ちゆく原」「墜ちゆく秋」など同パターンのリズム構成が目につくところぐらいか。

秀逸一席の樋口由紀子さんは、ムラのない作品をそろえて、身近な情感を自然体でしんと書き上げている。テクニクもなかなかしたたかである。(44頁に続く)

真実の予感

石部 明

Z賞の報せがあった時、置き場所に困って棚の上に放置されたままの、埃まみれの数々の大会トロフィが私を見てニヤリと笑った。
もともと「たかが川柳、たかが十七文字」という思い上がりを持って川柳に入った私は、文芸というよりもゲーム感覚で作句する期間が長く、作品一句はわが分身という意識を得て、自らの内側に川柳の触手をのばしはじめてからまだそれほど多くの時間は経過していない。

今もまだ言葉の上に表れる自らの真実とは何かがよく解らないまま、ひたすら体感を言葉に写しかえる作業に専念している。しかし、体感の行き着くところにある筈の真実の予感のすることがある。
指導者として私を触発して下さった三人の方と、多くはないが心の通いあう友と、私の作品から何かを感じて下さった選考委員の皆さんに感謝し、このZ賞をさらなる脱皮のバネとした。
ありがとうございます。



風 炎 賞

東 京 都

荻 原 久 美 子

たましいが這い出しそうで爪を剪る
屋の鏡 魚の名前をつぎつき生ける
秀逸2席の本多洋子さんは、昨年不慮の事故で客死した夫君への思いを、心の風景として描いているが、感傷を押しつけない技術的配慮が、逆にかなしみを深くする。

仁丹転がる男が生きていたように
綾とりの朱けの吊橋渡ってひとり
秀逸3席の小野多加延氏は、心境小説的な老いとの葛藤がメインテーマになっているが私小説のように、ひたすら内側にばかりめくれ込むことがないのがいい。

住む町に羊羹屋あり老いていく
指に付く花火の匂い 死後おもう
余白がなくなったが、こうした競作の場では、何を言いたいかははっきりしない個別作品の集合では、アピールが分散してしまうというところをつけ加えておきたい。

【後記】ご応募の皆さん、選考の方々、有り難うございました。多数の方々のご意見を容れて、入選作品30全句を収めました。誤植等希望をお寄せ下さい。不慣れなため大幅に遅れましたこと、今回ルビまで手の届かなかったことを深くお詫び申し上げます。(草兵)